

---

# 徒花の恋

ミナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

徒花の恋

### 【Nコード】

N4320Y

### 【作者名】

ミナ

### 【あらすじ】

見合い結婚をした智紀と木綿子。だが、些細な誤解のせいで、その新婚生活は幸せとはほど遠くて…？

携帯からカノンのメロディが流れ、木綿子（ゆうこ）は読んでいた本から目を上げた。

木綿子の足元でおとなしく伏せていたモモが、どこか嬉しそうな眼をして体を起こす。

時間は午後3時半。

智紀（さとき）からの定期連絡のメールである。

内容は、メールを見る前からもうわかつている。

多分今日も、遅くなる、もしくは帰れない、というものだろう。

モモのように素直に嬉しい気分にはなれない、と溜息をつきながらも、木綿子は携帯を手取る。

メールを開く前の一瞬、木綿子は今でも緊張のために目をぎゅっと瞑る。

開封の決定ボタンを押すのと、目を開けるのは同時だ。

『9時頃帰宅予定』

何の感情も読み取れない、本当に単なる連絡だけが目的だということだけがわかる、そんな文字の羅列。

だが9時という文字を見た木綿子は、一気に鼓動が跳ね上がるのを感じた。

珍しく早い。

まともな時間に智紀が帰ってくることは、月に一度あるかないか程度の頻度しかない。

『お食事は？』

『頼む』

たった、これだけのやりとり。

それきり、木綿子から送る用件も無く、もちろん智紀からも連絡が来ることは無い。

それでも木綿子は、しばらくの間指先が白くなるほど強く携帯を握

んでいた。

掌は汗ばんでいるような気がしたし、いまだに鼓動は全速力で走った後のように落ち着かない。

制御できない自分の体のそのような反応に、木綿子は齒噛みする。この速まる鼓動も、智紀の帰る9時には無駄なものになる、とわかつていた。

木綿子と智紀は、見合い結婚だ。

ただしそれは表向きの表現であり、実際は金銭の絡む政略結婚とも言えるものだった。

なぜなら、その見合いはもともと木綿子の家の資金援助の条件として提示されたものだったからだ。

木綿子の両親は、決して大きくはないが古くから続く料亭を営んでいる。

堅実な経営と誠実な接待により生き残っていたが、木綿子の父・實（みのる）が親類の保証人となったことで事態は一変した。

親類は逃げ、億単位の負債が淡谷家に押し掛かることになり、家も店も土地も全て差し押さえられる危機に追い込まれた。

そんなとき、常連客だった智紀の父・光昭（みつあき）が冗談半分に見合いと資金援助を交換条件に提案したのだという。

光昭は大手不動産会社の会長と社長を兼任しているやり手だが気さくで、木綿子が小さな頃からよく声をかけてくれていた。

淡粋が好きなのだと、特別目的が無くともよく来店しては、實と歓談していた、そんな人だ。

智紀は仕事ばかりで結婚しようとしないう、木綿子のような子が嫁に来てくれたらいいのに、などと話したらしい。

最初は冗談半分だったにも拘らず、当事者の預かり知らぬところですっかり纏まりがついてしまった話は、時を開けずして実行された。木綿子は見合いの理由が資金援助だということを聞いてはいたが、あまり気にしていなかった。

両親のことも、光昭のことも信頼していたからだ。

それに、相手が智紀だということも理由の一つだった。

智紀とは、木綿子が幼稚園に上がった年の終わり頃に、一度会ったことがあった。

光昭が、智紀の大学合格祝いと言って店に連れてきたのだ。

あまり良く覚えてはいないが、小さかった木綿子に笑顔を向けてくれたことだけは、覚えていた。

だから、どんな人になっているのか知りたくて、ただ会ってみたくて、そのときはそれしか考えていなかった。

実際会った時、木綿子はあっけなく胸をときめかせられた。

言うなれば、ひとめぼれに近い。

智紀は、長身でがっしりとした体躯を持ち、切れ長の目と少し薄めの唇が印象的な、大人の男だった。

このひとと結婚するかもしれない、と思うだけで自然と鼓動は弾んだ。

食事の支度を大方終わらせた後時計を見ると、智紀の申告した予定時刻よりも20分ほど過ぎている。

尤も、その程度の誤差は予想の範囲内で、今までで一番の誤差は2時間と40分の遅れだった。

オーブンの前で焼き上がりを待っていると、前の廊下をモモが走っていく。

智紀が帰ってきたのだとわかり、緊張がこみあげてくると同時に玄関のロックが外れる音がした。

これから、長い長い夜が始まるのだ。

木綿子は覚悟を決めると、玄関まで智紀を迎えに行く。

「おかえりなさい」

「ただいま」

木綿子は智紀がスーツの上着を脱ぎ、モモをかまいながらネクタイを緩めるのを、ぼんやりと見ていた。

棚の上に置かれた鞆にも気づいており、手がうずうずとする。  
やがて智紀は上着と鞆を手に、木綿子の前を通り過ぎて自分の部屋  
へ向かって歩いていく。

廊下を歩く智紀と智紀に付いていくモモの微かな足音に続き、やが  
て智紀の部屋のドアの開閉音が聞こえてくる。

木綿子は自分の掌を見つめて唇を噛んだ。

挨拶だけして突っ立っている自分が、うまくいかない結婚という現  
実を如実に表している気がして嫌だった。

そのとき、オープンのアラームが聞こえ、はっと顔を上げると木綿  
子は足早にキッチンへ向かった。

今日のメインメニューは、鶏肉のハーブ焼きだ。

小さめに切った鶏肉の上に、チーズを載せ、ドライハーブとオリ  
ブオイルを振りかけてオーブンで焼く。

そんな簡単なメニューだったが、洋食にあまり馴染みのない木綿子  
にしてみればなかなか頑張ったほうである。

テーブルの上に載った料理を見た智紀は、木綿子を労わるような目  
線をくれた。

「…あまり無理をしなくてもいい」

料理のことを言っているのだということはずぐにわかった。

実家は料亭で、和食のことならたいい教えられているが、もとも  
と洋食はあまり食べもせず、作ることは儘ならない。

ただ、智紀の母・瑞枝（みずえ）が智紀は洋食が好きだと言ってい  
たので、智紀が食事を取る時は努めているだけだ。

「あ、ええ…はい」

今までに同じことを何度か言われている。

というより、何度かまともな時間に帰った智紀に食事を出す度に、  
同じことを言われているのだ。

やはり嬉しくはないのだろうか、と木綿子は曖昧な笑みと返事を返  
した。

「うまいが」

俯き加減になっていた木綿子に、智紀は小さく付け足したように言う。

嬉しい言葉にぱつと顔を上げた木綿子だったが、智紀はそのときには既に左手に持った仕事の資料に視線を移していた。

「…お仕事、また持ち帰られたんですね」

「ん？ ああ、なかなか思うように捗らなくなてな。」

それに今日は西條に無理矢理…いや、まあいいんだが。君は、…お風呂は？ もう済ませたのか？」

「いえ、まだですけど」

「俺はまだまだかかる。君は先に入ってゆつくり休みなさい。片付けも自分でするから気にしなくていい」

声は優しい。

言い方も優しい。

だが言っていることは、ひとつも優しくくない。

つまりは、ひとりにしてほしい、ということだからだ。

しかも、途中で止めはしたものの、帰ってきたのは西條に無理矢理帰らされたからだ、と言った。

智紀の足元でお座りをしているモモを見ながら、木綿子は喉元に何かが詰まったような気分になり、静かに席を立った。

「わかりました。じゃあ、お先に…」

「ああ、おやすみ」

「…おやすみなさい」

小さく礼をしながら言うと、木綿子はダイニングからキッチンへと入る。

今日智紀のために作った料理は、インターネットで探したレシピだった。

プリントアウトしたその紙の束を掴むと、木綿子はキッチンを後にした。

キッチンから出てすぐのドアを開けると、プライベートエリアに繋がる。

パウダールームやユーティリティを通り過ぎた次のドアが、木綿子の使用している部屋だ。

一番奥には智紀の部屋のドアがあるが、木綿子はそのドアを使うのは、掃除をするときだけである。

ドアを見つめるのも虚しく、木綿子は振りきるように自分の部屋に入った。

本棚からファイルを取り出し、手に持っていた紙の束を無造作に入れる。

結婚してもう1年近くなるというのに、ファイルはなかなか厚みを増さない。

つまり、それだけ智紀が帰って来ないということだ。

そしてたまに帰ってきて、今日のように仕事を持ち帰り、会話らしい会話も無い。

そのうえ妻の木綿子よりも、ペットのモモのほうが優先順位がどうも上らしい。

しかも、別々の部屋で生活しているときた。

夫婦とは名ばかりで、完全な同居人として扱われているという事実が、木綿子に重く押し掛かっている。

小さいころ、将来の夢を尋ねられればお決まりのように、“お嫁さん”だと答えていた。

周りの友達に合わせてだんだんと夢を変えていく中でも、密かに内心では変わらない夢を持っていた。

だから急に両親から見合いをしないかと言われた時も、驚きこそすれ嫌な気持ちにはならなかった。

大学をもつすぐ卒業しようという年になっても、結婚に対するあこがれの気持ちは消えていなかったのだ。

多分、世の中の大半の人は、こんな木綿子を愚かだと言っだろう。



実際木綿子自身も今では、浅はかで馬鹿げた夢見る少女だった、と評価せざるを得なくなっていた。

結局、自分は本当に“借金の形”だったということだ、と今はわかる。

泣くものか、と必死で自分に言い聞かせながら、木綿子は視界が滲むのを感じた。

## 01（後書き）

このふたりは既に“夫婦”の間柄ですが、恋愛にすらなっていないせ  
ん。

何もかもをすっ飛ばして結婚だけした、単なる同居人です…。

しかも片や副社長で片や借金形…。

歳の差＋身分差（？）＋すれ違い夫婦という、なんか複雑なふたり  
です。

タイトルについてですが。

あたはな  
徒花とは、？咲いても実を結ばない花　？狂い咲き　の意味があり  
ます。

このふたつの面が、このふたりの恋に表れると思い、“徒花の恋”  
になりました。

どうぞしばらくお付き合いくださいませ。

会議用に資料を作成していた智紀は、ふと手を止めた。

ディスプレイの右下の時刻に目をやると、15:25の表示だった。時間に縛られることが大嫌いな智紀であるが、最近はこの時間になると必ず手が止まる。

意識しているわけではないのだが、体内時計に組み込まれでもしたのか、自分でもよくわからない。

結婚して10か月、午後3時半頃にはいつも木綿子にメールを送る事になっている。

プライベート用の携帯を手にとったところで、西條（にしじょう）がドアを開けて入ってきた。

「3時半ですが」

「わかってる」

「今日は何時にお帰りの予定ですか」

「帰らない」

「7時」

帰る時刻を指定するような声に、智紀は西條をじろりと見上げた。また始まった。

いつもは帰らないと言えばすぐに引き下がるくせに、たまにこうして無理矢理帰らせようとするのだ。

7時に帰るなんて、冗談じゃない。

近く始まる大がかりな再開発のための準備があり、だいたい明日の会議の準備も終わっていない。

「帰らないと言ってる」

「8時」

「西條」

「では、9時ということだ」

「おい！」

西條は智紀の声を無視して、運転手に車の準備をする時間を勝手に伝えてしまった。

言葉づかいは馬鹿丁寧なくせに、やることは強引極まりない。こつなるともう智紀も逆らう気力がなくなってくる。

仕方なく早めに帰ることにし、メールを打つ。

『9時頃帰宅予定』

その文面を覗きこんだ西條は、智紀を呆れたように見やった。

秘書としては最低な態度ではあるが、同級生かつ古くからの悪友であるため、咎められることは無い。

「何とかならないのか、その無愛想な文面は」

「うるさい」

「仮にも嫁さんなんだろうが」

言葉遣いを解いた西條の言葉は、的を射てはいる。

智紀がメールを送った相手は、確かに智紀の妻である。

だが、双方が望んでそうなったわけではない、と智紀は思っていた。

「…本当に、仮なんだよ。お前も知ってるだろう」

西條は智紀の言葉に肩を竦め、そのまま部屋を出て行った。

結局今の用事は、今日は智紀を早く帰らせるということだけであつたようだ。

まったく、長年つるんでいるが未だによくわからない男だ。

そのとき携帯が震え、メールの着信を告げる。

『お食事は?』

智紀の送った文面に劣らず、そつけないものであるが、頼めばきちんと用意してくれることは知っている。

今まで何度か早めに帰った時も、慣れないはずの洋食を準備してくれていた。

愛情の無い結婚を強いられているのにも拘わらず、木綿子は律義な女だ。

愛情の無い結婚。

我ながらうまい言い回しだ、と思う。

木綿子との結婚は、表面上は単なる見合いだが、実情はそうではない。

保証人になったばかりに莫大な額の借金を抱え込む羽目になった今は義父である實を、父の光昭が助けたのだ。

その代わり光昭は、いつまでも結婚しそうにない智紀に、木綿子という娘を宛がわせた。

当初智紀はまったく結婚するつもりは無かった。

両親が勝手に進めてしまった話であり、もともと結婚に対して興味も願望も無かったからだ。

ただ、相手が淡粋の娘だというから、興味本位で会おうとしただけだった。

昔一度だけ父に連れて行ってもらった高級料亭で、一目見かけたことのある子ども。

その子が今どんなふうになっているのか、見てみたい気がする、とだけ思っていた。

部屋に入った途端、艶やかな着物姿の木綿子が目に飛び込んできた。目を、奪われた、と言ってもいい。

小さな子どもは、既にその名残を消し、大人の女になっていた。

興味本位だったものが、形を変えて智紀の体内を衝き抜け、背筋がぞくりと震えた。

単純に、欲しいと思った。

だがその熱情とも言える想いは、呆気なく消されることになった。

木綿子が言ったのだ。

結婚すると決めた時、開口一番、父を助けてくれてありがとうございます、と。

つまり、木綿子は純粋に家のために、家の金のために、智紀と結婚しようとしていたのだ。

だから、智紀はいつか、光昭が肩代わりした金を實が返し終えるかその目処が付いたときには、木綿子を解放してやろうと思った。

もしそれよりも前に、木綿子に本当に結婚したい男ができれば、そのときにでもいいと思った。

それまでは少なくとも法的には自分の物だが、非生産的な想いを燦らせたままにしておくほど愚かなことはない。

智紀は、木綿子へ感じたものを強制的に消し去ることにした。

それはある程度成功し、今では木綿子のことを単なる同居人だと思えるようになっていた。

テーブルに並んでいたのは、やはり今日も洋食だった。

本来木綿子は和食しかできないと知っているが、どういっわけか智紀に対しては和食を作らない。

確かに智紀はどちらかと言えば洋食の方が好きではあるが、それを木綿子に言った記憶は無かった。

それに、木綿子の本当の得意な料理というものを食べてみたい気も少しはしていた。

「…あまり無理をしなくてもいい」

「あ、ええ…はい」

曖昧な笑みを浮かべて返事をした木綿子に、智紀は内心しまったと思う。

今までにも同じようなことを何度も言った気がするし、冷たく聞こえたかもしれない。

「うまいが」

慌てて付け足したように言い、智紀は手に取った資料に目を走らせる。

「…お仕事、また持ち帰られたんですね」

「ん？ ああ、なかなか思うように捗らなくてな。それに今日は西條に無理矢理…いや、まあいいんだが」

もともと、智紀は口数が少ないというわけではない。

たまに家に帰ってくると、ついすっかり何か口を滑らせるようなことになりそうで、用心している。

結局智紀はひとりのほうが性分に合っているのだ。

いつまでも木綿子と向かい合っているのもどこか気づまりで、木綿子にお風呂を勧めてさりげなく席を外すように仕向ける。

木綿子は静かに席を立てて挨拶をすると、キッチンのほうへ抜けて行く。

プライベートエリアへ繋がるドアの閉まる音が聞こえると、智紀はふう、と長い息を吐きだした。

箸をペンに持ち替えて資料をチェックし出すと、食べている間ずっと足もとでお座りしていたモモが不満そうに鼻を鳴らした。

ちらりとモモを見れば、じいっと智紀を見つめており、しつぽがぱたっぱたと床を軽く叩いている。

久しぶりに早く帰宅したのでかなり喜んでいるらしく、遊べと訴えている。

「しょうがないな」

智紀はペンを置くと、食器を先に片づけ、それからリビングへ行つて小さくて柔らかめのボールで遊んでやった。

嬉しそうにリビングと廊下を行ったり来たりするモモを眺めて、智紀は気持ちが悪く感じました。

モモは、智紀が拾ってきた犬だ。

捨てられてガリガリにやせ細った姿でうろついているのを連れてきたのだ。

もともとこのマンションはペット可で、ペットのための施設もあるし、モモも賢かったため問題は無かった。

智紀が結婚するまでの2年間、智紀は自分でも意外だと思いつつ、モモの世話はきちんとしていた。

最近では、滅多にここへ帰って来ないから、モモの世話は木綿子に任せきりになっている。

ボールを投げながら、そういえば、結婚前はそれでもきちんと家に帰っていたな、と智紀は思う。

ここまで頑なに、西條に無理矢理促されなければ帰らないのは、理由があるのだ。

だがもう、その理由も考えたくない。

もう何度目か、ボールを廊下に投げた智紀が時計を見ると、さきほどから40分ほど経っている。

戻ってきたモモの口からボールを外し、箱にしまつて終了を知らせる。

「これでお終い」

モモはまだ足りない様子だったが、素直に従った。

モモの小屋はバルコニーにあるが、冬の間はかわいそうなのでリビングにもスペースを作つてやっている。

モモは自分からそこへ歩いていくと、置いてある毛布にもぐり込んだ。

「…おやすみ」

わん、という返事にはほほ笑み、照明を落とすと智紀はリビングを後にした。

タイミングが悪かった。

智紀がドアを開けた瞬間、パウダールームから出てきたらしい木綿子が目の前にいた。

「きゃっ…」

木綿子は小さな悲鳴を上げ、軽く体を飛び上がらせてから智紀を見上げた。

智紀自身も驚いたが、木綿子の驚きようはかなりのものがあつたため、智紀はどこか申し訳ない気持ちになる。

「すまない」

「い、いえ…」

驚いたせいで、鼓動が跳ね上がったのだろう。

頭を横に振りながらも、木綿子はまだ軽く上下する胸のあたりを手で押さえていた。



木綿子はお風呂上がりのせいか、上気して顔も肌も少しだけピンク色に染まっている。

胸元が大きめに開いた白いネグリジェを着ており、照明のせいで木綿子のシルエットが生地にうつすらと映っていた。

その生地が終わりのからは、ほっそりとした手と形の良い膝頭、そして裸足の両足がのぞいている。

その様子を見ながら、智紀は必死で無関心と無表情を装い、木綿子が落ち着くのを待つ。

「大丈夫か」

「はい。すみません…」

「いや。…湯冷めしないように、おやすみ」

木綿子が挨拶を返すのが聞こえたような気がしたが、智紀は振り返らずに自分の部屋に向かった。

とにかく、早く木綿子から離れたかった。

部屋のドアを閉めた瞬間、智紀はドアに靠れかかりながら、目のあたりを手で覆った。

きつく目を瞑ったその瞼の裏に、今見たばかりの木綿子の姿がちらつく。

上気した肌。

生地に映し出された軀のライン。

呼吸に上下していた、手で押さえてもこぼれそうな胸のふくらみ。

智紀を見上げていた濡れたような瞳。

「畜生…っ」

顎が痛くなるほど奥歯を強く噛みしめたその隙間から、智紀は自分を罵るように悪態をついた。

年甲斐も無く熱くさせられてしまう自分が、腹立たしい。

頭も体も冷やそうとバスルームに向かいかけたが、木綿子が今出たばかりだと思いだして止めた。

木綿子が入ったバスルームに、浴槽に、お湯に、そんなものにまで

熱くさせられそうな自分がいる。

「…変態か、俺は」

最早笑うしかない。

渴いた笑いが、呼気となってひとりで口から漏れ出た。

だから、帰ってきたくないのだ。

消し去ったと思っっているものを、一瞬で、それもこんな些細なこと  
でいとも簡単に再燃させられるから。

家のために義務感で結婚した女を、未だに欲しがっていると思い知  
らされるのが嫌だ。

平静を装うために無駄に力を込めていた掌を開くと、くつきりと、  
四つの爪痕が残っていた。

## 02（後書き）

本当に、すれ違い夫婦。

お互いがお互いを、愛の無い結婚をしたと思っておりま  
す。  
なんて不毛…。

ところで、ネグリジエって着ます??

私は完ぺきなパジャマ派というか、スウェットとか着ちゃうん  
です  
が。

というか、ネグリジエって表現で合ってますよね…?（汗）

シンプルが好きな私は、レースとかフリルとかいっぱいのラブリ  
ー  
なランジェリー類には縁が無いもので…。

無知というか、女力無しというか…^^;

閉じたドアに靠れかかり、木綿子はネグリジエの裾をぎゅっと握りしめた。

無表情な智紀の顔を思い出し、惨めさにまたしても泣きそうだった。木綿子はいつもなら、ネグリジエなど着ない。

そもそも、このネグリジエだって自分で揃えた物ではなく、瑞枝からもらったものだ。

瑞枝は、ランジェリーからウェディングドレスまで幅広くデザイナーとして活躍しており、これも瑞枝のデザインである。

最近ではサンプルを木綿子のサイズに合わせて作ってプレゼントしてくれたりする、その中の一点だった。

素敵なものばかりで心が躍るとはいえ、見てくれる相手がいなければ空しいだけだ。

だから木綿子は、智紀が早めに帰ってくる日だけ、何かを期待するように着ていたのだ。

だがこれまで、智紀がその姿を見たことは無かった。

今日はこういうタイミングか、たまたま廊下で会ったために智紀の目に入るようになったが、あの表情だ。

ほんの少しの変化も動揺も感じられなかった声と表情に、木綿子の心は傷ついた。

全く関心を持っていないのだと、こんな風に思い知らされるなら、やはり止めておけばよかった。

木綿子はのろのと歩を進め、クローゼットを開けると、パジャマを取り出してネグリジエを脱ぎ捨てる。

いつもの格好に落ち着くと、今まで着ていたネグリジエをじっと見つめてから、そつと畳んで置いた。

もう何も考えないようにしよう、と言い聞かせてからベッドにもぐりこむ。

どうせ、明日からは智紀のいないいつもの日常に戻るのだ。  
ただそれだけのことだ、と木綿子は無理矢理自分を説得した。

木綿子の起床時間は、毎朝6時だ。

子どものいない専業主婦としては、それほど遅くないと思ってはいるが、智紀はもっと早い。

そろりと部屋のドアを開けても、人のいる気配はしない。

智紀は今日も、もう出てしまった後のようだ。

智紀の起床や出発に合わせようと以前は時間を聞いていたが、大抵いつも言うより早く、それが何度も続くうちにすっかり諦めてしまった。

リビングに行くと、モモが駆け寄ってきた。

「おはよう、モモ」

わんつ、と元気な返事。

多分今日もそうだろう、と思いつつテーブルの上を見ると、やはり智紀のメモが載っている。

小さな紙に、一言だけ。

“モモは散歩済み”。

そつと紙をつまみあげてもう一度部屋に戻ると、ミニデスクの引き出しから缶を取り出してその中に大切に仕舞った。

洋食のレシピとは対照的に、こちらの缶の中にはたくさんの紙が入っている。

そのすべてがモモの散歩に関する内容であるということが、哀しい笑みを生じさせる。

おはようとか、行ってくるとか、今日はどう過ごすのかとか、そんなことは書かれたことが無い。

それでも、こんなメモですら置いてあることにほっとしてしまうくらい、木綿子は温もりに飢えていた。

簡単な朝食を作り、ダイニングテーブルでひとり食事をする。

もう慣れたはずのことだが、智紀がたまに早く帰った夜の翌朝は、いつも以上に寂しく感じる。

この広い空間に、自分ひとりきりなのだと思い知らされるのだ。

箸が自然と進まなくなり、ぼんやりと空を眺めていると、食事を終えたらしいモモが寄ってきて鼻先を足に乗せた。

きゅん、という小さな声が、まるで慰めてくれているように感じて、木綿子はほほ笑む。

食事を摂ることを完全に放棄した木綿子は、椅子から下りてラグの上に座り込んだ。

「モモ、昨日はあの後智紀さんと遊んだの？」  
わふっ。

モモは嬉しそうにしっぽを振りながら答える。

「今朝も、お散歩楽しかった？」  
そつと頭や体を撫でてあげながら続けて聞くと、モモはますますしっぽを振って答えてくれる。

かわいくて、あつたかくて、木綿子はモモに触れながら気持ちをだんだんと落ちつけていく。

「モモがうらやましいわ…智紀さんと一緒にいられて」

それは、紛れもない本心だった。

もういつそのこと、犬か猫にでもなってペットになってしまいたい、とすら思ってしまう自分を苦く笑う。

木綿子は、首を傾げて自分を見つめるモモを優しく抱きしめた。

モモがいてよかった、というも思う。

もしもモモがいなくて、本当に自分独りだったら、きっとこんな生活は耐えられなかった。

「モモ、ありがとうね」

おとなしく木綿子に抱かれたままのモモに、静かにお礼を言う。  
しばらくそうしていると、何となく元気が出てきた気がして、木綿

子はモモを放してあげる。

立ち上がって気合いを入れると、木綿子は家事をするために動き出した。

ひと通り家事を終えソファでくつろいでいると、着信音が鳴った。デフォルト設定で、機器の中に元々入っているパターン音のため、相手は見なければわからない。

携帯を手にとって見ると、瑞枝からのメールだった。

『木綿子ちゃんおはよう。突然だけど、今日はお昼空いてるかしら？　もしよかったら、ランチを一緒にどうぞ？』

瑞枝の明るくて優しい話し方がそのまま反映されたような文面に、木綿子は思わずほほ笑んだ。

智紀との仲はまったく冷えきっているが、この結婚でただひとつ救いとなっているのは、義父母がかわいがってくれることだ。

光昭も瑞枝も、忙しいのによくランチやショッピングに誘ってくれ、まるで本当の娘のように接してくれる。

彼らが智紀と木綿子の仲はうまくいっていると思っている分、時折心苦しくなる時もあるが、それでも優しさは嬉しい。

お昼までにはまだ時間もたっぷりとあり、十分支度ができる時間だ。それに、ひとりで長い一日を過ごすより、優しい人と一緒に過ごすほうが良いに決まっている。

いそいそとOKの返信をするとお迎えに来てくれることになり、朝から続いていた沈んだ気分から、木綿子はようやく浮上した。

瑞枝が連れて来てくれたのは、最近瑞枝が気に入っているというフレンチレストランだった。

奥まった個室に瑞枝とともに案内され、先導してくれていた支配人が出ていくと木綿子はほっと息をつく。

醍醐のネームブランドを感じることは、まだ慣れていないしそもそも苦手だ。

淡谷家は名家と言われ、淡粹に足を運ぶ政財界の著名人とも懇意にしてはいたが、生活は普通の家と変わらなかった。

職人気質な實の方針で、度々誘われた社交界にも一切出ていなかったし、外でこういう特別扱いされることにも免疫が無い。

これが普通、と堂々としている瑞枝を見ながら、木綿子は多少の気後れを感じたが、瑞枝と喋り始めるとそれも気にならなくなる。

日本有数の会社の会長夫人、且つトップデザイナーであるにも拘らず、瑞枝は気取らない性格で木綿子を安心させてくれる。

やがて運ばれてきた料理も、食べるのがもったいないと思うほどの美しいものだった。

もちろん、味も最高に良い。

ランチは軽めのコースだったが、木綿子と瑞枝は満足の溜息をつい漏らす。

最後にデザートとコーヒーが運ばれてくると、店のスタッフの出入りは無くなり、ふたりはますますお喋りに興じた。

ふいに、カノンのメロディが流れ出し、木綿子ははっとした。

携帯を、マナーモードにするのを忘れていた。

それにしても、もう3時半か。

瑞枝と一緒にいると、つい時間を忘れてしまう。

急いで携帯を取り出したものの、メールを開こうとする手が緊張のために震えた。

昨日早めに帰ってきたから、多分、いや絶対に、今日は帰って来ないだろう。

そんな連絡のメールを瑞枝の前で開かなければならないことに、異常に緊張する。

「智紀からね」

「えっ？」

木綿子が何も言わないのに、瑞枝は相手を特定した。

どうしてわかってしまったのだろっ、と木綿子は瑞枝をじっと見つ



めてしまい、瑞枝は笑う。

「カノンだったからそうかしら、って。披露宴のときに流してたでしょう？」

「あ、…覚えてました？」

「当たり前よ。木綿子ちゃんがうちのお嫁に来てくれた日だもの。あの日のことは全部覚えてるわ」

自信ありげに言う瑞枝に、木綿子はほほ笑みながら内心では切ない気持ちでいっぱいだった。

パッヘルベルのカノン。

誰もが聞いたことのある、厳かに同じ旋律を追唱していく、名曲。

それは、披露宴で流したい曲があるか、と尋ねられて唯一木綿子が希望した曲だった。

美しいメロディが、何度も繰り返され、追いかけていく、その様が智紀との生活に反映することを願っていた。

だが、現実はそうではなかった。

結婚した初日から今まで、もう何度も思い知らされている。

それでも、自分でも呆れてしまうが今でもその願いは捨てられない。だから、最低限の機能しか使えない慣れない携帯を操作して、智紀の着信音だけ別の物に設定したのだ。

『今日は帰らない』

智紀のメールは予想通りの内容で木綿子を落ち込ませたが、瑞枝が目の前にいる手前そんな素振りにはできない。

できるだけ素早く了解の返信をすると、マナーモードに設定してからバッグへ放り込んだ。

と言っても、木綿子の携帯を知っている人はかなり限定されているため、この時間を過ぎればおそらくもう鳴らないだろうが。

「何て？」

「今日は、帰れないそうです」

「なんですって？」

「え……」

にこにこと聞いてきた瑞枝だが、木綿子の答えに表情と口調が一変する。

あまりの変化に、木綿子は驚いてしまった。

智紀との仲を誤解させるままにしている後ろめたさから、木綿子は他のことでは正直でいたかった。

だが今の質問に正直に答えたのは間違いだったようだ、とすぐに思ったが訂正するには遅すぎる。

「木綿子ちゃん、こういうこと、よくあるの？」

「あ、えつと……」

瑞枝に真っ直ぐに見つめられ、木綿子は答えあぐねる。

それが既に肯定の返事だと木綿子自身は気づかないまま、曖昧な笑みを浮かべて首を振った。

「と、時々です」

「……そう？」

「はい、それに、昨日は帰ってきてましたし」

「昨日“は”、ね……」

これは本当のことだ、と木綿子は力を込めて話した。

納得してくれたのかはわからなかったが、瑞枝はそれ以上は聞いてこなかったので、木綿子は安堵のため息をこっそりと漏らした。

瑞枝と別れると、木綿子はモモだけが待つ部屋に帰る。

玄関まで迎えに来てくれたモモとリビングへ行ったが、がらんとした部屋に、今日はなぜか朝以上の特別の切なさを感じた。

いつもならここまで気にせずともいられるのに、先ほどの瑞枝との会話のせいだろうか。

瑞枝は木綿子には何も言わなかったが、自分が智紀に疎まれているということに、気づかれてしまったに違いない。知られたくなかった。

昨日から泣いてばかりいる自分に嫌気がさしながらも、じわじわと目に水が盛り上がるのを止められない。  
どうしても埋められない何かを必死に埋めようと、木綿子はモモを抱きしめた。

### 03（後書き）

寂しい日常です。

箱入りだったため、卒業後も付き合えるような友達もいないのですね。

携帯も智紀と結婚することになってから使い始めたので、まだ慣れないし。

そんな環境なので、木綿子はモモ依存症です。

でも瑞枝は木綿子の強力な味方。

今後瑞枝の行動がきっかけて、10か月の膠着状態が少しずつ動いていきます。

散歩を終えて部屋に戻ってしばらくしてもまだ興奮気味のモモを抑え、智紀はテーブルの上に小さなメモを残す。

素っ気ない単なる連絡事項だけしか書いていないが、普段からろくに会話も無いため、あえて他に書くことも思いつかない。

せめて挨拶くらいは書くべきだろうか、と思いつついつも結局ペンが進まずに終わるのだ。

智紀が諦めてペンを置いた途端、もしかしてモモが飛びかかってきた。

わふっ！というもう少して吠え声になりそうな声がしんとしたりビングに響き、思わずモモの口を押さえる。

「こらモモ、静かに！ 木綿子起きるだろう」

ひそめた声でモモを叱ると、モモは一瞬委縮したが声は出さない代わりに今度は顔をべろべろと舐めてくる。

智紀はそれを苦笑しながら受け止め、自分が今口に出した名前を考えて、さらに苦笑を深めた。

本人には、名前で呼びかけたことが無い。

どこか虚しい気がするのは間違いないが、それは智紀なりの線引きでもある。

またしばらくは会わない、そんな日常に戻るのだから、そこまで気にすることも無いはずのことだ。

ひとしきりモモの相手をしてから時計を見ると、午前5時50分、もう少しで木綿子起き出す時間だ。

確かめたことは無いが、以前瑞枝との会話で起床は6時だと話しているのを聞いたことがあった。

木綿子と朝顔を合わせるのを避けたい。

智紀は急いでモモを離すと、いったんパウダールームへ行き顔を洗

つてから、身支度を整えて足早に玄関へ向かう。

お座りをして智紀を見送るモモに、しゃがみ込んで語りかけた。

「モモ、…彼女のこと、頼むぞ。言うこともちゃんと聞いてな」

関わりを持ちたくないと思いながら、自分が家に帰らない間の木綿子が心配でもある。

どうしても収束しない自分の思いに、智紀は諦めのため息をついた。ぶんぶんと振られるしつばは多分イエスの意味だろう、と勝手に解釈し、智紀はそつと玄関を出る。

ドアを閉め時計をもう一度見ると、5時56分。危ないところだった。

智紀はほつと息をつく、すぐにエレベータへ乗り込んだ。

昨日早く帰ったせいか、デスクの上にはうんざりするほどの稟議書や決裁書が積まれていた。

午後からは複数の会議が入っており、それまでに全部目を通せるかどうか、微妙なラインだ。

おまけに、今日は木綿子と会った翌日だ。

認めたくないことだが、木綿子と会うと智紀は決まって情緒不安定になる。

どこか苛々してしまい、仕事がいとも通り捗らなくなるのだ。

長めにモモの散歩をして少しは発散したと思っていたが、あまり意味は無かつたらしい。

コーヒーでも飲もうと秘書室へ続くドアを開けると、諸悪の根源である西條がいた。

ちらりと室内へ目を走らせたが、他の秘書の姿は無い。

定時よりも1時間以上早い時間だから当然と言えば当然であり、むしろこの時間にいる西條のほうがおかしいという話だ。

しかも、既にコーヒーの香りが漂っている。

「早いな」

「お前が早いだろうと思ったからな」

然も当然のように言いながら、コーヒーの入ったカップを渡される。これが西條の凄いところだ、といつも思う。

定時より早くしかも気分次第で変わる智紀の会社時間に、西條はぴたりと合わせたように出社している。

しかし、そこまで智紀の気分が推し量れるなら、最初から無理矢理家に帰そうとしないでほしい、というのが本音だ。

「で？ どうだったんだ？」

「何がだ」

「46日ぶりのご対面」

言われてみて初めて、前回会ったときから46日も経っていたのか、と気づいた。

世の一般の新婚夫婦ならえらいことだ。

幸運なことに、と言って良いかは不明だが、智紀と木綿子は一般的な夫婦ではないし、西條に聞かれたところで話すようなことも無い。

「べつに、いつも通り」

「飯食ってさつさと風呂入らせてサヨナラ？」

つまらなそうに、そして呆れたように言う西條には、無言で肯定を示した。

その後にあつたアクシデントが不意に脳裏によみがえりかけたが、コーヒーを流し込むことで押し止める。

「それより」

「なんだ？」

「毎回お前は、どうして俺を帰らせようとするんだ」

西條は一瞬口元を引き締めて、智紀を見返す。

何か言いにくいことがあるといつもこういう反応をするのだが、あいにくその内容までは推測できなかった。

「…あえて言うなら、翌日のお前を見るのが楽しいから、だな」

間を置いておいて何を言うかと思えば、西條は薄く笑ってそう宣った。

恐らく、本当の理由は別にあるのだ。

聞くんじやなかった、と苛つき度を増加させた智紀は、追加のコーヒーを入れさせ、さっさと部屋に引き揚げた。

最後にあった役員会議は思ったよりも長引いた。

役員のほぼ8割は、智紀よりも年上で頭の固い人間だ。

理想とプライドだけは高い厄介な相手に、智紀の疲労と苛々は頂点に達していた。

部屋に戻ると、手にしていた資料をデスクの上に叩きつけ、どさりと椅子に体を投げ出す。

と同時に、秘書室から続くドアが開き、西條がコーヒーを持ってくる。

「お疲れさまでした」

「まっただ」

不機嫌そうに返す智紀の顔を見ると、西條は気の毒そうに笑った。それから少々姿勢を正してから、会議中に入った電話などについての報告を始める。

「全て、折り返すと伝えましたが、また掛け直していただけるようです」

「わかった」

「それから最後に、…会長の奥様から」

「…誰だって？」

誰だかはわかっていいるのだが、あまり聞きたくなかった肩書きである。

聞き返す智紀に、西條も苦笑を混じらせてもう一度言い直す。

「会長の奥様の、醍醐 瑞枝様です。副社長のお母様とも言います  
が」

「そこまで言わなくていい」

「何が何でも会議が終わったらすぐ掛け直せ、とのことでした」

「相変わらず無茶苦茶言う人だな」

「どうやら、かなりお怒りのご様子でしたので」



慇懃な言葉遣いとは裏腹に、西條の表情はかなり面白がっているように見え、智紀は憮然とする。

それにしても、最近はお互い忙しくほとんど会ってもいない瑞枝が何だってそんなに怒るのか。

接触が無いのだから怒らせるようなこともしていないはずだが、なんとなく厄介なことが待っているような気がして智紀は溜息を漏らした。

ワンコールも鳴り終わらないうちに、瑞枝の尖った声が聞こえた。

「遅いわよ」

かなりの不機嫌さが伝わってきて、智紀は思わず受話機を耳元から離してしまう。

だが理由もわからずに不機嫌さを丸出しにされるとするのは、気分が良いものではない。

「なんですか、一体」

自然と、智紀も声が尖ってしまった。

しかしそれに負ける瑞枝ではない、というよりそもそもその仕込みは瑞枝なので、智紀が勝てるはずもないのだが。

「智紀、あなた、一体どういう生活しているのかしら」

「…はい？」

「まさか、この期に及んでまだ独身気分にいるわけじゃないでしょうね？」

話の行き着くところが、どうも不穏な感じがして、智紀は言葉に詰まった。

智紀との生活は別として、木綿子が瑞枝とかなり親しくしているのは智紀も知っている。

結婚生活については木綿子がうまくごまかしているのだと思っていたが、瑞枝の口振りからすると、どうやら何か勘付かれたらしい。

「智紀、聞いているの？」

「…聞いてますよ」

「昨日“は”、帰ったみたいですけど、その前はいつ帰ったのかしら」

あからさまに“は”を強調されて、智紀は顔を顰める。

そして咄嗟に朝の西條との会話を思い出したが、正直にその数字を言う気にはもちろんなれなかった。

だが答えに詰まった時点で、言えないくらい前のことだと既に伝わってしまっていることは確実だ。

予想を上回る厄介な内容に、智紀は内心で大きく舌打ちをした。

「何が言いたいんですか」

「何ですか、その態度は。木綿子ちゃんは下手な嘘ついて必死にあなたのこと庇ってた、っていうのに」

確かに、木綿子は嘘が苦手だろう。

なんせ言わなくてもよかったはずの結婚の本当の理由まで、無意識のうちだろうが智紀に正直に言ってしまうほどだ。

そう思いながら、智紀は自嘲気に口を歪めた。

「とにかく。あの部屋に木綿子ちゃんをひとりにしておくわけにはいかないわ」

「だからって、どうするつもりなんですか」

「今後は、パーティに連れていきます」

瑞枝はきっぱりと言い切ったが、智紀はあまりのことに絶句した。

木綿子は、はつきり言って社交界慣れしていない。

実際、智紀との婚約披露や結婚披露のパーティですら、ガチガチに緊張していて後で気分を悪くするほどだった。

そのため、それ以降パーティに招かれることがあっても、いつも欠席してきたのだ。

それを知っている瑞枝が、木綿子をパーティに連れ出そうとするなど正気の沙汰とは思えない。

「…無理でしょう」

「誰がひとりで連れ出すと言ったの。あなたも行くんですから、無理なことはいわ」

「は？」

「用件はそれだけよ。日時は追って連絡します。いいですね」

いい、とも、悪い、とも言わせてもらえず、瑞枝の言葉が終わると同時に電話は切れた。

颯め面の智紀は、一体何なんだ、と溜息をつきながら、受話機を元の位置に戻す。

瑞枝の意図は即ち、智紀と木綿子がとにかく一緒に時間を過ごすように仕向けたい、ということだ。

そのためには、確かにパーティが一番手っ取り早いことは智紀も否定はしないが、問題は智紀も木綿子もそれを望んでいないことにある。

だが瑞枝は言い出したら必ずやる人間だし、木綿子が瑞枝に反対すると思えない。

それに、結婚生活の実態が暴かれそうな今、瑞枝に逆らうことは避けておきたい。

つまり今の智紀に選択の余地はないということである。

木綿子をエスコートしなければならぬ自分を想像すると、智紀は頭痛を感じて目をきつく瞑った。

## 04（後書き）

瑞枝さん怒りのパワーで発動です。

智紀が家に帰ろうとしないので、強制的に一緒にいさせる作戦です（笑）。

智紀は基本押しに弱いタイプ。

突っかかりつつも結局瑞枝さんや西條にいつも押し切られています。その点木綿子は引きタイプなので、智紀との関係改善には時間がかかりそう…。

「あの、本当に行かないとダメなんですか？」

「奥様のお言いつけですので…」

「そう、ですよね…」

「智紀様もいらっしゃるそうですから、不安に思われずとも大丈夫ですよ」

先ほどから何度繰り返したかわからない、このやり取り。

運転手の伴（ばん）は本来は瑞枝付きだが、今までに何度も面識があるため、木綿子も気軽に会話を交わせる。

けれど、智紀がいることも不安要素なのだ、とは決して言えないことくらいはわかっている。

木綿子は今、瑞枝が遣した伴の運転する車のゆったりとした後部座席に納まっているが、気分は決して寛いでいない。

それどころか、これから連れて行かれる場所を思うと気は滅入る一方だ。

木綿子は身に着けている慣れないドレスとピンヒールに目をやり、引き攣った表情のまま溜息を吐きだした。

昨日、突然瑞枝から入ったメール。

『明日ちよつとお付き合ひしてほしいところがあるんだけど、時間空いてるかしら？』

気軽な感じだったので、大して気にも留めずに了解の返信を送った。

『じゃあ、4時半頃に迎えを遣るわね』

いつもなら迎えに行くと言う瑞枝が、迎えを遣ると言ったことに若干の引っかかりを感じたが、流してしまった。

どこに行くのか、なぜ瑞枝と一緒に来ないのか、もっとよく確認するべきだった。

と、今なら確実に思うのに、昨日の木綿子はそれをしなかった。

“後悔先に立たず”とはよく言ったものだ。

迎えに来た車に乗り、まず連れて行かれた店で着せ替え人形よろしくドレスや靴やアクセサリーを宛がわれた。

その後また車に乗せられ連れて行かれたのはヘアサロンで、またもやメイクとヘアメイクをばっちりと施された。

木綿子自身何が何だかわからないまま、あれよあれよと言う間にすっかりパーティー仕様になってしまった。

そこで、いくらなんでもと伴に尋ねてみれば、この後の行先は東京オリエンタルホテルだった。

格式高いこのホテルは、醍醐の管理物件の一つであり、実質的なオーナーは光昭だと言って過言ではない。

おまけに今日は、懇意にしているイギリスのメガバンクRBEの重鎮たちが来日しており、歓迎と親睦の意を込めたパーティーがあるという。

つまり、瑞枝がちよっと付き合ってほしいと言ったのは、このパーティーなのだ。

恐ろしいことになった。

木綿子は自分が社交界向きで無いことを嫌というほど知っている。自分の婚約や結婚のときのパーティーですら、極度の緊張のために思っ出したくないほどの惨状に陥った。

会社の関係者、しかも外国人が相手となれば、さらにひどいことになるのは目に見えている。

そういうわけで、冒頭の会話へと続くことになったのだが、逃げ出すことは無理だということも、悟っていた。

到着して伴が運転席から降り、木綿子の側のドアを開けたが、木綿子の体は緊張のためか強張りうまく動けない。

今からこんなでは後々どうなるか、しかも今は早く降りなければ邪魔になるのはわかっており、気ばかりが焦った。

「木綿子様、大丈夫ですか…」

「す、すみません」

心配そうな伴に、木綿子は泣きそうな声で謝る。

どうにかして降りなくては、と思った時、伴が驚いたようにあつと声を漏らすと急に木綿子の視界から消えた。

と同時に、木綿子の腕と腰を誰かに抱かれて、あつという間も無く車から降ろされる。

地面に足が着いた感覚と、勢いで抱え込まれる格好になった事実には狼狽えながら視線を上げると、智紀だった。

「伴、すまなかつたな」

「いいえ。お帰りはいかがなさいますか？」

「車で来てるから、適当に抜けるさ」

「承知いたしました。では、お氣をつけて」

頭上で交わされる苦笑交じりの会話など耳に入らず、木綿子はただただ触れ合っている面に神経が集中していた。

むき出しの腕を掴む掌の強さと、薄い布地のドレス越しに感じる掌の温度と、未だ抱きしめられている体勢のために感じる腕の中の温度。

今までに感じたことが無いほどの近さに、免疫のない木綿子の心臓は壊れそうなほど高鳴り、体中の血液が沸騰しそうだった。

「…大丈夫か」

自分に向けられている言葉だと気づくのに、しばらく時間がかかった。

間を開けてぼんやりと見上げると、覗き込むようにしていたらしい智紀の眉間に小さな皺ができる。

迷惑がられた、と咄嗟に思い、木綿子は一瞬で冷水をかけられたような気分になった。

「今からこんなで、中に入って本当に大丈夫なのか？」

けれど智紀の声は想像していたよりも冷たいものではなく、表情も純粹に心配しているように見えた。

「すみません。こういうのは苦手で、しかも今日は急だったので緊

張ってしまったて…」

「だろうね。まったく、あの人も無茶させる」

苦笑しながら相槌をうち、ため息交じりに母親についてばやく智紀を、木綿子は珍しそうに見上げる。

場所が違うせいか、智紀の雰囲気はいつもと違って見える。

たまに部屋で会うときの、息苦しいまでの他人行儀な様子や突き放すような態度が見えない。

他人の目があるからかもしれない。

過剰に期待しないよう木綿子は自分に言い聞かせる必要があったが、それでも少しだけ安堵する。

気が緩んだのか、舞う風に寒いという感覚を思い出して木綿子の体は小さく震え、智紀はそれに気づいたようだった。

「すまない、ここにいるても寒いだけだな。とりあえず入ろう。歩けるか？」

「あ、はい」

体を離されて木綿子は途端に心細くなったが、代わりに腕を差し出されそつと手を寄せる。

智紀は相変わらず木綿子自身には興味が無いようで、ドレスにも靴にも髪型にもメイクにも特に感想は無い。

それでも普段なら触れることはおろか近づくこともできない智紀に、触れてもよいきちんとした理由があることだけでも今は嬉しい。

木綿子の歩調に合わせて半歩前をゆつくりと歩く智紀に付いていきながら、木綿子は緊張とは別の種類の鼓動を感じていた。

受付を済ませ会場へ入ると、大勢の人とその優雅な雰囲気の木綿子は圧倒された。

しかも、滅多にパーティに出ない智紀と木綿子是否が応でも人目を惹き、気づいた人々がちらちらと視線を寄越す。

そこかしこからの視線と密やかに交わされる言葉たちが、木綿子には全て恐ろしいものに見えてしまう。



自分がものすごく場違いな気がして、ひいていた緊張がわつと押し寄せた。

知らぬうちに腰が引け、智紀の腕に副えていた手に、まるでしがみつくように力が入ってしまう。

こんな不格好な相手が同伴では智紀の評価に影響する、というのは容易に想像がつき、さらに緊張が増すという悪循環。

ひとりぐるぐると考えていると、智紀が急に止まった。

何事だろう、と智紀を見上げると、苦笑を浮かべた智紀が思いの外優しい視線を寄こしている。

「今日は時間縛られてないパーティだから、適当に挨拶したらすぐに帰れる。

俺と一緒にいるから、誰かに話しかけられても俺が話せばいいし、君は余計なこと考えないでとにかくいてくれるだけでいいから。

まあ、視線を向けられたらちよつと笑ってくれば万々歳ってところだが。…できそうか？」

「は、はいっ」

思い切り力んだ返事に、智紀は笑った。

その顔に、木綿子の心臓はまた飛び跳ねる。

智紀は小さく頷くと、木綿子の緊張を宥めるように、智紀の腕に副えてある木綿子の手をばんぽんと左手で軽く叩いた。

その仕草に驚きつつも、ここで頼れるのは智紀だけだと今更ながら実感した木綿子は、覚悟を決めて姿勢を正した。

満面の笑みを湛えた瑞枝と光昭に迎えられ、そのまま傍にいたRBEのCEOだとかCOOだとかいう偉い人に紹介される。

英語のできない木綿子は、彼らと対等に会話している智紀の隣で、言われた通り微笑を浮かべることで精いっぱいだった。

時間にすれば恐らくほんの5分ほどだったはずだが、緊張しすぎていたせいで、話し終わった今は目の前にいたはずの彼らの顔も覚えていない。

「…もう大丈夫だよ。頑張ったな」

少し離れた場所に連れて行かれ智紀にそう言われても、貼りつけた笑みのまま顔が固まっただけで、ぎこちない表情しか返せない。

場を光昭に任せ、瑞枝が傍に来て、さすがに心配そうに木綿子を見つめてくるのがわかる。

「木綿子ちゃん、大丈夫？」

「なわけ無いでしょう。しかも何も知らずに来させられて」

大丈夫、と答えようと口を開きかけたが、木綿子が声に出す前に不機嫌そうに智紀が答える。

だが、ある意味それが本音ではあったので、木綿子は智紀がそう言うてくれたことは素直にありがたかった。

「それは悪かったと思ってるわ。ごめんね木綿子ちゃん。次からはちゃんと事前にお知らせするから」

「つ、次…？」

助けを求めるように智紀を見上げたが、智紀は苦虫を噛み潰したような顔をしているものの何も言わない。

もう一度瑞枝に顔を向け直すと、うふふつという笑い声が聞こえたと同時に耳元に小声で囁かれた。

「パーティの間は、智紀もずっと一緒よ」

意味を理解した途端、木綿子は内心軽くショックを受けた。

この間瑞枝と一緒にランチをしたときのやり取りを思い出し、今の状況はそのせいだと思ひ至る。

智紀は、仕事を言い訳にさせず木綿子と時間を過ごさせる、という瑞枝の謀に嵌められたのだ。

そして直前の智紀の反応からすると、おそらく智紀も瑞枝の意図を知っている。

車を降りる時から今までの智紀の優しさは、単に自分に向けられるためだけのものではやはり無かった。

べつに、期待なんてしていなかった、というのは強がりだとわかっていても、そう思わなければやっていられない。

玄関まで智紀に送り届けられたが、智紀は一緒に中へは入らなかった。

普段なら何も言わずに送り出すところだが、今日はどうしてかそうしなくなかった。

たとえ答えが分かりきっていても、それでも聞かずにはいられない。「智紀さんは…？」

常にない木綿子の態度のせい、智紀が答えを口に出すまでに少しだけ間が開いたが、答えは相変わらずだった。

「…仕事、放り出してきたから。今日は多分泊りになる」

「そう、ですよ。…行つてらっしゃいませ」

「…行つてくる」

ドアが閉まると、木綿子は小さく笑った。

初めて直接智紀に言えた送り出すための挨拶がこんな形とは、切ないやらおかしいやら。

少しでも智紀と接することができたため、瑞枝の気遣いは嬉しかったが、その反面、余計に哀しくもある。

これからもこんなことが何度もあると思うと、心臓が痛みでおかしくなりそうだった。

## 05（後書き）

パーティ初回でした。

緊張しまくりの木綿子を、智紀はきちんとエスコートしてくれました。

が、終わったらやっぱり行ってしまっ智紀。

いつになく優しくされたら、やっぱり少くらい期待してしまうのが女ですよ…。

なので、木綿子は嬉しさと哀しさとでいっぱい입니다。

智紀には困ったもんですね。

## 06（前書き）

なんと。

小説のタイトル間違えてました…（T・T）

ご指摘いただき（感謝！）、直しました。正しくは「徒花の恋」です。

恥ずかしすぎる…

日時は追って連絡すると言ったくせに、瑞枝からパーティの連絡が入ったのは当日だった。

それもほとんど直前の時刻になってから、木綿子は既に迎えを遣って連れ出した後だという事実と併せての連絡だ。

悠長にも日時の連絡が来たら木綿子に言えればいいと思っていた智紀としては、大誤算のうえ最悪のパターンだと顔を引き攣らせる。

百歩譲って智紀はまあいいとして、木綿子には事前に何の連絡もできなかったのだから、恐らく今頃パニックに陥っているだろうと思うと哀れだ。

会場にそのままひとりで入ることになどなれば、どうなってしまいかは容易に想像がつく。

木綿子が現地に着く前に自分が現地へ行き、迎えてやらねばならぬ。

今日やるべき仕事はまだかなり残っていたが、智紀は早々に切り上げてホテルへ向かった。

ロビーでソファに座り、外の様子を窺いながら待っていると、伴が運転する車が止まるのが見えた。

智紀はすぐに立ち上がり、車を見ながら歩き出したが、中にいるはずの木綿子は一向に出てくる気配が無い。

心配そうに伴が中を覗きこんでいる姿に、智紀の予想通り木綿子はかなり緊張していることが窺えた。

後ろに数台の車が待機し始め、伴も焦り出したのか木綿子のほうに手を出そうとしているのが見え、智紀は足を速める。

触るな。

思わず口を衝いて出そうになったその言葉に、馬鹿馬鹿しいと溜息がこぼれる。

その念が強すぎたのか、それとも単に靴音に気づいたのか、伴は智紀の姿を見つければドアの前から飛び退いた。

強張った体で座席に縫い付けられているかのような木綿子を、智紀は体ごと抱き上げるようにして外へ出させる。

伴と言葉を交わす間、木綿子が身動き一つしないのをいいことに、智紀はしばらくの間木綿子を腕の中に留め続けた。

普段どれだけ関わりを持たないよう意識していても、こうして近くにいることになってしまえば、触れなくなるのは当然のことだ。

本当はいつだって、触れたい、優しくしたい、傍にいたい。

とうに消したはずのそんな欲求が、木綿子の存在を感じたその一瞬で甦ってしまうのだ。

だが今日は木綿子に触れて良い真つ当な理由があるし、智紀も衆人環視の中であれば簡単に欲情するようなへまはしない。

智紀はエスコートという正当な理由を笠に、普段できないその反動のように木綿子に接した。

木綿子が、智紀しか頼れないとばかりに身を寄せてくる、その様を見つめる智紀の心には、暗い歓びが広がっていく。

たとえ木綿子の側には心が無くとも、今だけは、木綿子には自分しかないのだ、という矮小で仄暗い想い。

結局、瑞枝の思惑に乗せられて、今後もパーティを断ることはできないだろうと思うと、智紀は苦いものを感じた。

今日、いつもと違ったのは智紀だけではなかった。

玄関に入った木綿子の目が、どうしてか揺らめいて見える。

「智紀さんは…？」

最初、何を聞かれているのか咄嗟にわからなかった。

木綿子がこのように問いかけてくるのは珍しいことだ。

普段であれば、智紀が玄関に入らなかった時点で察して、何も言わずに自分だけ家に入っていくのが木綿子なのだ。

首を傾げたところで、もしかして一緒に入ろうと言われたのではな

いだろうか、という気がした。

しかし、これは多分単に自分の願望がそう聞こえさせただけだ、とすぐに結論付ける。

「…仕事、放り出してきたから。今日は多分泊りになる」

「そう、ですよ」

木綿子の答えは、普段とあまり変わらず淡々としているように聞こえる。

けれどやはり、表情がいつもと違って見えるような気がしてしかたがない。

何より、纏わりつく雰囲気は落胆を物語っているように思える。

「…行つてらっしゃいませ」

揺らめいたままの目が智紀を見つめたまま、送り出すための言葉がぼつりと呟かれた。

小さな声だった。

初めて聞くその言葉に、なぜか、智紀は胸が締め付けられるような痛みを感じた。

「…行つてくる」

木綿子の視線から無理矢理逃れるようにドアを閉めると、心に何かが何重にも積まれているように重苦しい気分になる。

自分が、ひどい人間のように思えた。

「実際ひどいんじゃないか」

会社に戻った智紀を当然のように待ち受けていた西條に、智紀は重苦しい胸の内を話したが、その返答がこれだった。

さらりと追い打ちをかける西條を、智紀は恨めしげに見るが、当の本人は肩を竦めるだけでその視線にこれっぽちも頓着しない。

そのうえここぞとばかりに集中砲火を浴びせかけ始めた。

「お前、自分の行動をよく考えてみるよ。だいたい結婚してからの方が家に帰ってない、っておかしいと思わないのか。」

前は俺らにやらせてたような仕事までやって無理に仕事増やして、



俺が無理矢理帰らせなきゃ、いつまでも帰ろうとしないし。

それだって月一あるかないか…。その間嫁さんはあのマンションでひとりきりでずっと過ごしてるんだろう」

「モモもいる」

「アホか」

我ながら小学生でも言わないアホな返答をしたと思っていたら、即座に突っ込まれた。

心底呆れた、とでも言いたげな西條の視線が居たたまれなくて、智紀は長い溜息を漏らしながら視線を床に向ける。

こうして並べたてられると、確かに智紀の行動は不自然でひどいものだ。

自覚していなかったわけではないが、他人から言われると説得力がありすぎて落ち込んだ。

「嫁さん、結婚前は実家にいたんだろう。いつも家族とか店の人に囲まれて過ごしてたんだろうな。」

それなら、ひとりきりのことが多い今の生活は、かなり寂しいんじゃないか」

西條に言われて、智紀はふと木綿子の家に結婚の挨拶に行った時のことを思い出した。

父の實、母の涼子（すずこ）、弟の傑、そして淡粋のスタッフ皆が木綿子を見守っているようだった。

温かい人々に囲まれて、幸せそうにしていた木綿子を思い浮かべる。そして、マンションでひとりきりでモモと過ごす木綿子を想像してみる。

それは今更ながら、ひどく寒々しい光景だった。

寂しいのだろうか、寂しいだろう。

智紀が与えるまで携帯電話さえ持っていなかった木綿子だ、交友関係は狭いに違いない。

純粹に親のために結婚したなどと親には絶対に言えないだろうし、嘘が苦手だから、実家ともそんなに連絡を取っているとは思えない。

今日の様子がおかしかったのも、慣れないパーティで心細い思いになったままで、まだ不安な心持ちだったのだろう。

「お前の気持ちもわからないでもないが。…どんな理由でも、結婚した以上は夫婦だろ」

「…そうだな」

パーティの最中に感じた自己中心的な仄暗い独占欲を思い出して、智紀はさらに落ち込む。

木綿子を独りにさせている罪悪感と、独りにさせざるを得ない自分の感情とで、智紀の胸中はひどく荒れた。

「まあ、結婚したことの無い俺が言っても説得力無いが」

智紀の心中を察したのか、西條はおどけたように付け足した。

そして智紀も、そんな西條の気遣いがありがたく便乗させてもらう。「ほんとにな。しかもお前俺に付き合って仕事ばかりじゃがって、お前こそ彼女が寂しがってるんじゃないのか」

「べつに。今のところ犬猫しかないし」

「寂しいなあ、おい」

「…お前に言われたくない」

至極尤もな返事だ。

これ以上藪蛇になりたくない、と溜息をつきつつ仕事に取り掛かり始めた智紀を確認すると、西條は部屋を出て行く。

智紀の耳には痛い正論でなんだかんだと責めつつも、心配してくれているらしい西條に、智紀は苦笑しつつ感謝した。

その後も瑞枝はこちらの都合にお構いなくパーティの予定を入れてきた。

事前に連絡をくれるようになったのはいいが、ひどい時は平日にも予定が入りさすがの智紀も辟易した。

だがそれでも一応木綿子を気遣っているらしく、立食形式のパーティばかりであるのが救いだ。

木綿子も相変わらず緊張に悩まされているが、数をこなすうちにほ

んの少しだが以前よりは慣れてきているようである。

そしてパーティの日は、今や智紀の実験の日となりつつある。

初日の木綿子の雰囲気忘れられず、次回以降、智紀は木綿子との接触を少しずつ増やしてみようと思いついた。

手始めに、パーティの後一緒に帰ることにしてみたが、最初に一緒に玄関に入った時の木綿子の顔は、ちよつと忘れられそうにない。

“鳩が豆鉄砲を食ったよう”とはこういうことなのだ、というほどに驚いた表情で智紀を見上げていた。

裏を返せば、それほど智紀が家に帰ることが珍しいと思われるということ、智紀としては複雑でもあつたが自業自得だ、致し方ない。

二度、三度と続くと、やがて木綿子は驚かなくなった。

だが、果たして木綿子がそのことを歓迎しているのか、ということについては自信が全く無い。

それも実験してみようと思いついた日、智紀はドアのところで立ち止まってみた。

靴を脱いだ木綿子は、入って来ない智紀を不思議そうに見上げた一瞬後、はつとしたように表情を硬くした。

驚いて内心少しばかり慌てた智紀が、そのまま玄関へ入って靴を脱ぎ出すと、木綿子の表情は、明らかにほつとしたように緩む。

その表情の変化が痛ましくて、智紀は木綿子を試そうとしたことを後悔した。

西條と話していたように、木綿子はこれまでよほど寂しい思いをしていたのだ、と思い知らされた。

愛していない結婚相手に、いつもひとりきりの生活では、不幸なことの出来ない。

木綿子に優しくすればするだけ苦しくなるだろうことはわかっているが、木綿子がこれ以上不幸になるのも本意ではない。

それ以来、パーティの日はいつも木綿子と一緒に帰るようにした。

つまり、パーティの数だけきちんと家に帰るようになったのだから、結局瑞枝の思惑にしっかりと乗せられたのである。

だが本当の問題は、一緒に帰った後部屋の中でどう過ごすかなのだ、と智紀は頭を抱えた。

## 06（後書き）

大切だと思うから、独占欲を押しつけそうで近づけない。

それでも寂しそうな木綿子のために優しくすれば、今度は自分が苦しい。

そんな矛盾に葛藤する智紀でした。

が、如何せん方向性が間違ってるんですよ〜^^；

愛してなかったら、帰ってきてくれてほっとするわけないということに早く気付こうよ…。

みたいな感じですが、まだもうしばらくは平行線です。

クロゼットを開けたまま、木綿子はしばらく迷い、結局ネグリジェを手に取ることにした。

今日のネグリジェはアイボリーホワイトの膝丈のもので、胸元がV字に開き、サイドには解けば完全なスリットになる紐がある。

わざとらしくない程度の清楚な雰囲気と、どぎつくない程度のセクシーさを併せもつそれは、やはり瑞枝のデザインだ。

男性の観点はよくわからない木綿子であるが、着るのに羞恥心が刺激されることを考えれば、路線としては間違っていないはずだと思う。

それなのに、と木綿子は小さな溜息を漏らした。

そんな姿で智紀の視界に入る機会は以前よりも格段に増えたものの、連続して惨敗中である。

もしかして似合っていないのだろうか、とも思ったが、瑞枝が似合いそうなものを作ってくれているのを知っているので、多分違う。

やはり中身の　つまりこの場合木綿子のせいなのかもしれないが、体型についての自己判断は当てにならない、と思うことにする。

あからさまに変な顔や嫌な顔をされるよりも、関心を全く示されないほうが辛い。

どうせ今日だって少しも気にしてはくれない、とわかっているのだが、それでも着てしまうのは最早意地の境地なのだろうか。

瑞枝の計らいで智紀とパーティに出席するようになってから、早くもひと月が経とうとしている。

相変わらずひどく緊張するが、少しは慣れてきている。

そして何より、パーティの日は智紀と一緒に家に帰って来てくれる。どうして智紀がそうする気になったのかを木綿子は知らないが、理由などとはもうどうでもよく、ただ嬉しかった。

瑞枝に出席を促される頻度がかなり高いため、最近の智紀の帰宅頻度も同じく高い。

と言っても、状況は以前と然程変わらない。

一緒に帰ってきてても、家の中で一緒に過ごす時間がものすごく増えた、というわけでも当然ない。

少し雑談めいたことができるようになったくらいで、あとはいつもと変わらず、気づけばお風呂に追いやられておりそのまま就寝する羽目になる。

智紀の酒に付き合えばまだマシだったのだろうが、木綿子は酒にめっぽう弱く、智紀にも無理をすると言われてしまった。

肴をすることで少しは時間を稼げるのだが、なかなか木綿子の思うようにはいかないのである。

お風呂からあがった木綿子は、廊下に人の気配がないことに頂垂れた。

相手にされないとわかっていても、とりあえず智紀の視界に入りたいのだが、いないのではそれも無理だ。

テレビか何かの音がうつすらと聞こえるので、多分リビングにまだいるのだろう。

だが用事が無くては傍に行けないのは十分わかっており、それが哀しく歯痒い。

今日はもう諦めよう、と思い部屋に入ると、携帯がチカチカと光っていた。

『木綿子ちゃん、旅行のお誘いです。とってもいいお宿があるんだけど。』

もうすぐ1年だし、記念日に合わせて4人で家族旅行なんてどうかしら。もちろん、智紀とふたりがよければそれでOKよ』

瑞枝からのメールだった。

もうすぐ1年、という文字に、あとひと月足らずで本当に1年経つことに気づき、木綿子は奇妙な気持ちになった。

最近でこそ一緒に過ごすことが少しは多くなったが、全く夫婦らしい関係ではないままでもう1年も経ってしまうのか。

そんなことが実際有り得るのだな、と自分のことながら呆れてしまう。

この先も、ずっとこんなままなのだろうか、と思うと空恐ろしいことである。

「旅行：かあ」

瑞枝の誘いは、とても嬉しい。

智紀とふたりで旅行などとしては、恐らくお互いに気づまりで困ってしまうだろうし、そもそも智紀が記念などとは思わない恐れもある。そう考えると、光昭や瑞枝と一緒に4人で家族旅行に行くというのは、かなり魅力的に思えた。

どれだけ冷めた関係でも木綿子にとってはやはり記念日は記念日であり、その日くらい明るく楽しく過ごしても罰は当たらないはずだ。返信前に智紀に相談しなければならいことを思い出した木綿子は、今晚は傍に行く理由ができた、ということに気づき、心の中で瑞枝に感謝した。

リビングは照明がほとんど落とされており、智紀はソファに座りグラスを片手に映画を見ていた。

木綿子がドアを開けた音に気付いたのはモモだけで、智紀はモモが木綿子に駆け寄ったことでようやく木綿子に気づく。

「どうした？」

すぐに用事を話してもよかったのだが、なんとなくもったいない気がした。

画面に映る映画は木綿子の知らないもので、残りがあとどれくらいなのかもわからなかったが、少しでも一緒にいたかった。

「い、つしよに、見ても、いいですか？」

「…ああ」

どきまぎしながら聞いたせいで、かなり不自然な聞き方になってし



まった。

智紀の表情はあまり読めなかったが、とりあえず嫌がられはしなかった。木綿子はそのまま智紀の隣に腰を下ろす。

その一瞬、智紀の視線を強く感じた気がした。

ちらりと見上げてみても、智紀は画面を注視しているようだったから、気のせいだったのかもしれない。

10人くらいは余裕に掛けられるソファで、わざわざ智紀の隣に座ったというのに、本当に気にも留められないというのはかなり切ない。

だが今までそんな機会は無かったのだから、とりあえずそれでもいい。

映画はアクションもので、もともと木綿子には馴染みのないジャンルだったし、途中から見たせいで全く話が掴めなかった。

だから、映画と一緒に見ると言って座ったのに、木綿子は智紀ばかりをちらちらと窺っていた。

時々グラスを傾ける智紀の、グラスの淵に触れる唇と、液体を飲み下すその瞬間上下する喉骨に、どきりとする。

スピーカから出る音が大きくて助かった。

静かだったら、心臓の音が大きすぎて智紀にも聞こえてしまいそうだったと思った。

映画が終わると、智紀は照明を元に戻した。

明るさに慣れずにぱちぱちと瞬きを繰り返していると、智紀は酒やグラスを自分で片づけ始めてしまう。

「あ、あー…私が」

慌てて立ち上がるうとしたが、智紀に手で制されてしまい、仕方なくもう一度座る。

キッチンへ向かう智紀の足元にモモが纏わりついているのを見て、

木綿子は一瞬本気でモモが羨ましくなってしまう、そんな自分に哀しくなる。

片づけたまま自分の部屋に行ってしまったらどうしよう、と密かに心配していたが、智紀はきちんと戻ってきた。

ただし、元々座っていた場所からひとつ空けた席にだ。隣に座るのはNGだったらしい、と切なくなりながら智紀を見上げると、智紀はどこか困ったような顔をしていた。

そんな表情を見たのは恐らく初めてで、木綿子は智紀の気持ちがよくわからず、こちらも困ってしまう。

「それで、何か話があったんじゃないのか？」

「え、あ、はいっ」

どうしてわかったのだろう、と思いながら、木綿子は旅行の件を話し出した。

話し終えても智紀が特に何も言わなかったので、やはり行きたくないのだろうか、と思い始めた頃ようやく智紀が口を開く。

「…行きたいか？」

「あの、……はい。家族で旅行、って、なかなか無いですし」

本当は記念日だから行きたいのだが、そんなことを正直に言っただけなら怖いから、家族旅行を前面に出してみた。

実際、家族旅行というシチュエーションが楽しみなのも、嘘ではない。

淡粋は不定休だったし、旅行に行けるほどまとまった休みが取れるわけでもなかったから、特に家族旅行などしたことは無い。

行ったことのある旅行は、修学旅行だけである木綿子としては、瑞枝の誘いはかなり嬉しかったのである。

「じゃあ、行くか」

智紀は意外とあっさりと答えを出した。

そのことに驚きつつも、行けるなら何でもいい、と木綿子は思わず笑顔になる。

その後いつものように早々におやすみの挨拶をする羽目になったが、それも気にならないほど木綿子の気持ちは浮き立った。

週末、二日間ともパーティが入っていることは、既に珍しいことではなくなっている。

そんな感覚に、随分慣れたものだな、と思うが、精神的にも身体的にも楽ではないことは確かだ。

だいたい立食パーティで形式に気は遣わないが、逆に様々な人々と話す機会が多く、その面では非常に気を遣うのだ。

昨日に引き続いて今日も智紀と連れだって出席したパーティで、よろよとまでは行かないが、木綿子はかなり疲れていた。

遠目で智紀に向かって手を上げて挨拶を送ってくる男性と、それに返す智紀に気づき、木綿子は長話になりそうだと内心溜息をつく。

「多分、長くなる。君は座って待っていたほうが良さそうだな」

「え…？」

「疲れてるんだろう。少し休んでいたらいい」

智紀に連れて行かれた先に用意されていたアームチェアに、促されて腰掛ける。

ひとりになるのは心細かったが、他にも腰掛けて休んでいる物静かな年配のご婦人たちを見て、ほっと小さく息をつく。

同じ会場内だが、ここは少しだけ時間や空気の流れが異なっているように思えた。

「話し終わったら戻るから」

「はい、あの、ありがとうございます」

智紀は軽く頷いて、先ほど手を上げてきた男性のもとへと歩いて行った。

正直限界かもしれないと思っていたので、休憩できるのは素直に嬉しい。

そして、智紀のこういう気配を感じるたびに、胸がきゅっと痛む。今更ながら、智紀のエスコートは完ぺきなのだ。

優しい手、木綿子に合わせて進む歩幅、木綿子が苦手なお酒を勧められたときにやんわりと断る口調。

それに例えばエスカレーターに乗る時、必ず木綿子の側に体を少しだ

け向けてくれること。

乗り合わせている周りの女性たちの静かな感嘆のため息とそれぞれのパートナを言外に責める目線が、智紀に大切にされていると木綿子に錯覚させる。

何より、木綿子の体調や気持ちに気を遣い、疲れたと思っていてとこうして休ませたり、可能な場合は帰るようにしてくれる。

馬鹿だと思いつつ、期待してしまうのは、女の性なのだ。

本当に、馬鹿だ。

と、今確信してしまった。

しばらく休んで随分楽になったと、目を開ければ、智紀が目に入っていた。

立ち上がりかけた木綿子は、智紀の隣にいるひとに目を奪われ、不自然な姿勢で硬直してしまう。

それは、先ほど手を上げていた男性ではない。

智紀と並んで全く見劣りしない、一言で言うてゴージャスな女性。

何か言葉を交わしているふたりの、エスコートの域を超えて密着しているその自然な様は、木綿子に強烈な敗北感を味わわせた。

「やっぱり、ネグリジェとか、そういう問題じゃなかったんだなあ

……」

思わず小声で呟いてしまい、聞かれてしまったかと慌てて周囲を見回したが、誰にも気づかれていないようだった。

そのことにほっとして、そして、見たばかりの現実には力が抜けて、

木綿子はアームチェアにもう一度体重を預ける。

パーティの日は、智紀があまりに優しいから、特に昨日は映画なんて一緒に見てしまったし、旅行も行ってくれると言ったから。

だから勘違いしてしまったではないか、と誰に対してかわからない怒りに似た感情が湧く。

取れたはずの疲れがまたどっと襲ってきたような気がして、木綿子はきつく目を瞑った。

## 07（後書き）

一緒に家に帰っても、智紀はなかなか手強い様子です。  
でも、瑞枝のおかげで1年記念の旅行には行けそうです^^

ラストのゴージャス美人は、愛人なのか！？ ……なんちゃって、彼女が誰なのかは、次回わかります。

めんどくさい相手に捕まってしまった。

腕を組んでべったりとひつついている女　佐那（さな）に内心悪態をつきながら、智紀は引っ張られるように早足で会場の外に向かって歩く。

「ちょっと、そんな仏頂面しないでよ」

「付き合っただけありがたいと思え」

久々に会った旧知の男との長話を終えて、ようやく木綿子のもとへ行けると思っていたのに、これでは大誤算だ。

腕と一緒に胸まで押しつけられているこの状態を、智紀は全く歓迎していない。

「超久しぶりに会ったっていうのに、もう少しくらい飲んでよね」

「こんな再会じゃなければな。だいたい、いつ帰ってきたんだお前」

「一昨日よ。ほんととは、なんだっけ、木綿子ちゃん？　智紀のお嫁さんも見てみたかったのに」

「会場にいるんだが」

「わかってるわよ。こんなはずじゃなかったの！」

苛々と言葉を出す佐那を見て、こんなはずじゃなかったのは自分も同じだ、と智紀も苛々と溜息を吐きだす。

佐那は、智紀の従妹である。

ずっと外国暮らしをしていてほとんど会うことも無いうえに、佐那は仕事の都合で智紀の結婚式にも来ていない。

今回のパーティで木綿子に会うつもりでいたらしいが、予想外且つ避けたい人物に出くわしたらしく、逃げているのだ。

それも、たまたま近くで捕ってしまった智紀が恋人のふりをしながら、という厄介なオプション付きだ。

相手が醍醐とは何の関わりも無い外国人だから通じる手だが、パー

ティ出席者のほとんどは日本人で、智紀と木綿子が連れだって来ていることを知っている。

なんとなく、怪訝な視線が向けられているような気がして、智紀の苛々は増すばかりだった。

「Sana! Wait for me, please! (佐那、待って!)」

もうすぐホテルを出る、というところで、猛然と歩かされていた智紀の後ろから、叫ぶように呼ぶ声が聞こえた。

件の人物が追ってきたらしい。

「呼ばれてるぞ」

「知らない」

「諦めれば」

「うるさい」

そんなやり取りをしている間にも、佐那を呼ぶ男はその長い脚をフルに活用して、走り寄ってくる。

前に立ちはだかった男は、智紀よりも数センチ目線が高い。

目聴く智紀の左薬指のリングを見つけた男は、その秀麗な眉を顰めた。

「…佐那、悪いが諦めろ」

さりげなく佐那の腕を外し、男に向かってホールドアップして見せる。

佐那が目吊り上げて、裏切り者、と呟いたが、智紀は聞こえないふりをして、会場に戻るために背を向けた。

腕時計を確認すると、木綿子と別行動になってから40分は経っている。

佐那のせいでもないタイムロスをしてしまった。

いい加減、木綿子も心配になっているに違いない、と智紀は会場へ歩を速めた。

急がせていた足を止めたのは、木綿子の隣に座る男のせいだった。

いや、男を見たときは咄嗟に、絡まれているのかと思ってむしろ足を速めようとしたのだ。

そうしなかったのは、そうできなかったのは、木綿子の表情のせいだ。

安心しきったように男を見上げ、柔らかな笑みを浮かべている。

見たことのないその表情に呆然としつつ、よくよく男を見てみれば、見たことのある顔だった。

あれは、千家の流れを汲む流派の家元の長男であり、要するに次期家元だ。

瑞枝はもちろん、智紀もひと通りの作法を覚えるために、昔習いに行ったこともあるから、その時に多少面識がある。

淡粋との繋がりには十分に考えられるから、木綿子と知り合いなのだろうというのも頷けた。

だがそれでも、自分に対してはそんな顔しないじゃないか、とどこか卑屈な怒りが智紀の中に点る。

同時に、当初決めていたはずの自分の決意を改めて思い出し、何とかその怒りを消そうと躍起になる。

ここ最近でかなり増えた木綿子との接触によって、その決意は既に大きく揺らいでいる。

木綿子が結婚したい男が他にできたら手放してやろう、などと、このままでは思えなくなってしまうようなのだ。

実際、今こうして他の男と話す木綿子を見ているだけで、足が縫い付けられたように動かなくなってしまうほどだ。

抱える矛盾が日々大きくなってきているということを痛感し、智紀は息苦しげに小さく呻いた。

男と話す木綿子を遠目に見ながら、智紀は昨日の木綿子の様子を思い出す。

珍しく、一緒に時間を過ごしたかった。

あれだけ広いソファであるにも拘らず、すぐ隣に腰を下ろした木綿



子が、智紀には不思議だった。

思わず一瞬だけまじまじと見つめてしまったが、相変わらず木綿子の格好は目の毒で、すぐに目を逸らす羽目になったのだが。

智紀が見ていた映画は、木綿子にはあまり縁の無かったものらしく、しかも途中からだったせい、木綿子には合わなかったようだった。木綿子の視線がほとんど、映画ではなく自分に向けられていたのに、智紀も気づいていた。

多少の居心地の悪さを感じつつも、問いかけることなどできず、理由はよくわからないままだ。

それにしても、旅行の話には参ってしまった。

ろくな結婚生活も送れないふたりが、旅行などに行ってどうなるのか。

瑞枝の計画なら、ふたりが別室になることなどあり得ないのだから、さらに不安である。

恐らく結婚一周年を強調して誘ったのだろう瑞枝の顔を思い浮かべ、内心苦りきった智紀だったが、行きたそうな木綿子についてっかり負けてしまった。

瑞枝は烈火のごとく怒るだろうが、本当は忙しさを理由に断つてもよかった。

というより、智紀としてはできれば断ってしまいたかった。

けれど木綿子が家族旅行だと嬉しそうにしているのを見たら、とても断ることなどできなかったのだ。

無理に結婚して離れることになった家族を思っているのかもしれない、と思うと胸が痛んだのだ。

光昭と瑞枝も同行するのだから、道中は特に問題も無いだろうと思っただのも、要因だった。

宿でのことは、そのときになってみないと何とも言えないが、4人同室ではあり得ないはずだから何とでも誤魔化せる。

全く意気地のないことだ、と自嘲した智紀の視線の先では、男と木綿子が携帯を手に談笑している。

その仕草から、携帯の番号等を交換しているのだろうということがわかった。

止めると言って良いのか悪いのか、それさえもよくわからず智紀が動けない間に、交換は無事に終わったようだ。

男が笑顔で挨拶をしてから去っていくのを見てから、智紀はようやく次の一步を踏み出すことができたのだった。

今、自分はそうとうに機嫌が悪いのだな、と智紀が認めたのは、見上げてくる木綿子に苛立ちを覚えたからだ。

その表情は、どこか必要以上に固く、冷めたような色をしている。少なくともここで休憩させる前までの木綿子は、こんな表情をしていなかった。

いつものように緊張はしていたが、今のようになんかを拒絶するような雰囲気は無かった。

あの男と会って話したことで、ここまで変化をしたのだろうか、と思い始めると気分の降下がさらに加速していく。

先ほど感じた卑屈な怒りは、少しも消えてなどいない。

心の中がどんよりと淀んだものでいっぱいになった気がして、智紀はこれ以上この場にいることができなかった。

「…帰ろう」

木綿子に聞こえたか聞こえないかわからないくらいの声で言って、

智紀は外へ向かって歩き出す。

少しして、小走りをしているような靴音が耳に入り込み、智紀はようやく自分が木綿子の歩幅を考慮せずに歩いていたことに気づいた。感情に振り回されて配慮ができないようでは、まるで子どもだ。

苦い思いを抱え、智紀は改めて歩幅を縮めた。

智紀が今日いつも通り家に帰ったのは、半ば意地のようなものだった。

玄関のドアを開けた瞬間、木綿子が息を詰めたのだ。

木綿子は、まるで全身がアンテナになっているかのように、智紀が家に入るかどうかを窺っていた。

最近では智紀が帰ることに慣れ、帰るか帰らないかなど気にしていなかったはずなのに、今日に限ってどうしてそこまで緊張したのか。

木綿子の態度の異変に気づいた智紀は、嬉しさなど感じるよりも腹立たしさが先行した。

あの男に、あんな顔をしていたくせに。

それなのに、俺の帰宅をそんなに気に掛ける必要がどこにある。

そんな、自分でも馬鹿かと思うほどの幼稚な思いが心を占めていくのが嫌で、それも腹立たしい。

けれどここで腹立ち紛れに出かけて行くのはもっと幼稚な気がしてできなかったのだ。

尤も、以前木綿子を試した時の木綿子の様子を覚えている限り、どうせそんなことはできない智紀ではある。

自分の感情も行動も思い通りコントロールできずに苛立ち、智紀は靴を脱ぎながら乱暴にネクタイを解くと、そそくさと自室へ引きこもった。

木綿子が今どんな表情をしているのかなど、見る余裕も無かった。

## 08（後書き）

ゴージャス美人は、従妹でした^^；

追いかけていたフォーリナーは、佐那の恋人候補？です。

智紀はただ佐那に付き合わされただけで、しかも木綿子に見られた  
と思ってないですが、木綿子は見事に誤解してます。

そして今回、木綿子が男と仲良くお話している姿を見て智紀もカウ  
ンターを食らいました（笑）。

こうして誤解とすれ違いが重なっていくのであります…。

智紀が玄関の中へ入りきるまでの数秒間、息ができなかった。

今日は、あのひとに会いに行くためにこのまま外へ行ってしまうのではないか、と思っていたから余計に怖かった。

けれど今は、帰ってきはしたもののかなり苛立った様子を見せた智紀のほうがかもつと怖いと思ってしまう。

本当は会いに行きたいと思っっているのではないか。

名ばかりの妻がいるがために、窮屈な思いをしていると感じているのではないか。

しかし、それを確認する勇気も隙も無い。

廊下に響いた、智紀がドアを勢いよく閉めた音が、木綿子の心にもきつく響き渡った。

いつもはリビングで寛いでいる智紀だが、今日は部屋に閉じこもったままで出てくる気配が無い。

広い部屋の大きいソファで、独り座っているのは切ない気分を増大させるだけだ。

ひとりでに溜息が漏れ、心配してくれているらしいモモが足もとに纏わりついてくる。

いつもはモモを抱きしめたり撫でたりしていると落ち着くはずの気持ちだが、今日はそうもいかない。

「…寂しいよ」

ついぼろりと零れ出てしまった言葉が、思ったよりも大きく響く。

以前は、智紀が家にいることのほうが珍しかった。

今は、頻繁にあるパーティのおかげで、智紀が家に帰ってくることが増えていく。

いないことが普通だったのに、少しでも一緒に過ごす時間があると、どんどん欲張りになっていくのだ。

言ってしまったのは本音だが、以前に比べると随分贅沢なものであるとわかっている。

けれどそれも言わなければよかった、とすぐに後悔するくらい、寂しさがひどく身に沁みて両膝を抱え込んだ。

感情が不安定だったせい、床に就いてもなかなか眠りは訪れなかった。

ベッドの中に入って仰向けになった姿勢のまま、木綿子はぼんやりと宙を眺めている。

時折枕元に置いてある携帯を手に取り時刻をチェックするが、その度に時間は5分ほどずつしか進まない。

そんなことを何度も繰り返しているうちに、一通のメールが入った。『今日は久しぶりに会えて良かった。また何かあったら何でも言うておいで』

パーティ会場で智紀とあのひとの姿を目撃してしまった後、偶然会った秀也（しゅうや）からだ。

秀也は木綿子よりも4つ年上だが、子どもの頃から度々会っていたこともあり、いわゆる幼馴染みのようなものだ。

秀也の家は茶道の世界ではかなり有名な家で、昼に懷石料理を出す正午の茶事のためによく淡粋を利用していた。

木綿子が大学に通いだした頃からあまり会う機会も無く、智紀と結婚した後は全く会うことが無かったが、今日久々に会って話が弾んだ。

幼馴染みのようだという気安さから、うまくいっていない結婚生活についてもついうっかり少しだけ零してしまい、かなり心配されてしまった。

実家に伝わりでもしたら大変だと慌てて取り繕ったが、秀也は何とも言えないような顔をして、いつでも相談には乗ると言ってくれた。秀也は相変わらず優しい近所のお兄さんのような存在で、直前に見てしまった智紀たちの姿も、秀也と話している間は影が薄れた。

それから、秀也は自分の近況についていろいろと話してくれ、最後に携帯のアドレスを交換してくれた。

そういうわけで秀也は、木綿子の携帯のアドレス帳に初めて入った、家族以外の人だ。

なんとなくこそばゆい感じがして、木綿子はしばらくそのメールを見つめていたが、そのうちようやく眠気がやってきて、素直にそれに従った。

そんなことがあっても、日常生活は変わらずに続いた。

智紀は仕事が忙しい日には相変わらず、帰って来ないか、帰っても夜中で朝早くにまた出て行ってしまい、顔を合わせる機会はあまり無い。

それでもその後何度か入ったパーティの日には、今まで通り家に帰ってきて、リビングで映画などを楽しみながら酒を飲んでいる。

智紀と一緒に歩いていたあのひとを、その後のパーティで目にしたことは無いし、智紀もあの日の苛立ちが嘘のように、木綿子のエスコートも完ぺきだ。

あの日から三週間余り、このままこの日常が続くならば、見てしまったことを忘れてしまってもいいような気さえした。

いや、忘れてしまいたい、と願っているというのが本当のところなのだが。

結局のところ、智紀の考えていることがわからない、というのが一番の問題なのだ。

ほとんど一緒に過ごしたことが無いとはいえ、一応結婚した仲だと言っのに。

ベッドの上に座りながらぼんやりとそんなことを考えているところに、携帯の着信音が鳴り響いて現実を引き戻される。

『準備進んでるかしら？ 明日は楽しみね^^』

瑞枝からだった。

メールの内容に、思わず携帯の画面から目の焦点をベッドカバーの上に移す。

小さめのキャリアバッグと、なかなか選べずにほとんど全ての洋服やインナー類が所狭しと重なり合うように並べてある。

智紀のことを考えながらの準備は、思うように進まないでいる。

なるべく素敵なものを選びたい気持ちと、どうせ見てももらえないという諦めの気持ちと、そしてあのひとのこと。

結婚一周年という旅行の意義が、どうにも現実味を帯びない。

それでも、智紀は本当に旅行に行ってくれるようだし、準備も木綿子に任せると言ってきた。

せっかくなので楽しみたいのは当然の気持ちであり、何はともあれ一緒に行けることで満足したいというのもある。

木綿子は大きく息を吸いこむと、思いきり吐き出し、気持ちを切り替えて今度こそ準備を進めた。

いつもの定期便メールで早めに帰ると送ってきた智紀だが、20時を過ぎた頃に珍しく予定変更の連絡が入った。

どんな理由かまではわからないが、とにかく予定よりもだいぶ遅くなるから先に休んでいて良いというものだった。

あのひとの影を感じたような気がして、木綿子は一瞬どきりとしたが、明日からのことを考えて無理矢理気を逸らせることに成功したリビングには、準備を終えたキャリアバッグが二つ、並んでいる。

義務とか職務でなく、ふたりで一緒にどこかへ出かけられるということが、何より嬉しい。

しばらくその並んだバッグを眺めてから、木綿子は幸せそうにほほ笑んでリビングを後にした。

チャイムが鳴ったのは、0時半過ぎだ。

いつもの智紀なら、日付が変わってから時間帯に自分の帰りを木綿子に知らせることは無い。



それに来客にしては非常識な時間だ、と木綿子はチャームを無視して眠り直そうと目を瞑るが、瞑ったその瞬間にもう一度鳴った。

仕方ない、と溜息をつきながら体を起こしていると、今度は家の電話が鳴り出す。

ガウンを引っかけて急いでモニタを覗くと、携帯を耳に当てて立っている西條と、西條の肩にぐったりと凭れかかっている智紀がいた。慌ててどうぞと声をかけてロックを外したところで、ようやく電話が鳴りやんだ。

廊下を走って行きドアを開けると、モニタで見たのとほぼ同じ恰好でふたりが立っている。

「夜分に申し訳ない」

「いえ、あの…どういう」

聞きかけて、木綿子は漂ってきたきつい酒の匂いに顔を顰め、困惑したように口を嚙む。

西條は極めて普通の様子であるのに対して、智紀は一目でひどいとわかる有様である。

髪は乱れ、顔は赤く、瞼も重そうで、自分で立つことさえ儘ならず、おまけにシャツのボタンは上から三つも外されている。

ネクタイとベルトは西條の手にあり、智紀がネクタイを頭に巻いていないだけマシか、というほどの泥酔状態だ。

智紀は酒に強い方だし、普段無茶な飲み方はしないため、こんな状況に陥った智紀は見たことが無い。

「随分ひどい呑み方をしたようで、店の方から連絡が来ましたので迎えに行ったのですが。」

エントランスはいいとして、奥さまのいらっしゃる家には勝手には入れないと思いましたが、失礼かと思いましたが出ていただきしました」

「そんな、とんでもないです。迷惑をかけてしまって、申し訳ないです」

淡々と説明する西條に、木綿子は謝ったが、内心は混乱していた。

変更された帰宅時間とこの酩酊ぶりは関りがありそうだと思うが、西條の口振りからは何かを推察することはできなかった。

何はともあれ、木綿子ひとりでは智紀を運ぶことなどとてもできないため、迷惑ついでに西條に部屋まで運んでもらうことにする。

途中、開け放たれたままの木綿子の部屋のドアに西條の視線が向けられた時には、焦りや気まずさを感じたが、西條は事務的にただ通り過ぎただけだった。

西條は秘書である前に智紀の学生時代からの友人と聞いているし、恐らく夫婦生活の事情も知っているだろうが、指摘してこないところがありがたい。

智紀を寝かせてもらい、時間が時間だからとすぐに辞す西條を玄関まで送り出すと、木綿子は智紀の部屋まで舞い戻った。

夜の時間帯に、しかもベッドに智紀がいるときに、この部屋に入るのは初めてだ。

何も無いことはわかりきっているのに、妙な緊張感で、水の入ったペットボトルを持つ手が震えている。

そつとベッドに近づくと、智紀は体の右側を下にして、つまり背中を向けて横になっている。

ベッドの真ん中付近にいる智紀に近づくために、木綿子はベッドに膝をついて乗ってから正座になった。

心臓の音がうるさい。

それを振り払うように深呼吸をひとつしてから、震える指を叱咤しつつ、名前を呼びながら智紀の肩に触れてみる。

「んん…」

呻くような声と、眉間に寄る皺、そして吐き出される苦しげな息遣い。

智紀が応えるのを待てず、木綿子は少し力を入れて智紀をこちら側に向けさせた。

「お水、持ってきましたから。飲んだほうがいいです」

「水……」

ようやくまともな反応が返ったことに安堵し、智紀の頭を支えながら、ボトルを口につけて水を飲ませる。

ごくり、ごくり、と何口も飲むと満足したのか、智紀はボトルを離すように顔を少し背けた。

智紀の頭を枕に就け、ボトルの蓋を閉めてから智紀に目を遣ると、ぼんやりとした表情だが木綿子をじっと見つめる目とぶつかる。

こんな風に見つめあったことなど、今までにない。

まともな状態でもないのに、木綿子は胸が騒ぎだすのを感じてベッドから降りようとしたが、それは叶わなかった。

手が、触れて、腕を、掴まれた。

どきりとしたのは、そのせいだけではない。

「智紀さん？」

困惑した木綿子が思わず呼んだ名前に、智紀はこれまでに見たことが無いほどの、嬉しそうな顔をした。

益々意味がわからず、どうして良いかわからなくなった木綿子は、不意に腕を引っ張られて呆気なく体勢を崩す。

そうして、押しつけられたのは、唇。

視界がぐるりと回り、背中にはベッドの感触、目の前にはぼやけるほどに近い智紀。

狼狽に埋め尽くされた木綿子を押し止めたのは、智紀の声だった。

「ゆっ……」

名前を呼ばれたのだと思った。

元々抵抗したいわけではなかったため、それで、一気に力が抜けた。初めてのキスは、咽かえるような酒の匂いと多くの困惑と少しの愛しさに塗れていた。

## 09（後書き）

前半傷心、後半困惑。

旅行前夜に初めてのキス、ですが喜べない展開です。  
次回は、智紀のヤケ酒（笑）&突然のキスの理由。

淡々と過ごす日常は、智紀の心に一応の平安をもたらした。

あのパーティの日のできごとは、最早気にしないことできる。

今までだって、木綿子に関心を持たないよう努力すればできないことも無かったのだから、今回も同じことだ。

刻々と近づく旅行の日付だけが、今の懸念材料である。

木綿子に行くと約束した以上反故にするつもりは無かったが、外堀から既に固められていたのには苦笑ものだ。

智紀が西條に日程調整を頼めば、既に瑞枝から通達済みでオフになっていると言われた。

まったく、根回しの良いことだ。

結婚一周年とは、なんとも味気ないものだと思っていることなど知られたら、どうなるかわかったものでない。

一番の敵は、木綿子でもあの男でも無く、母親だと溜息をついた。

しかし、いくら懸念があろうとも、日は廻ってくるものだ。

とうとう旅行前日、という今日にしても、普段となんら変わらない日常を過ごしていた。

明日早く出発することを考え、今日は早めに帰るつもりで木綿子にメールもした。

けれど、そうもいかなかったのは、光昭からの内線と實からの電話のせいだった。

光昭からは、實から電話で返済計画の目途が立ちそうだと連絡があったと言われ、實からも同じ内容の電話が来たのだ。

それも、實からの電話には、直接会って話したいという要望も付いていた。

實と話し終えて受話機を置いた掌には、嫌な汗をかいていた。

光昭によれば、返さなくて良いと予め言っていたのに毎月少しずつ

返済し、その金額は月を追うごとに多くなっていたらしい。

わかつてはいたがやはり實は真面目で律義な男だ、と光昭は笑っていたが、智紀は笑えなかった。

實の声もどこか晴れ晴れとしていて明るいものだったが、智紀は明るい気持ちにはとてもなれなかった。

木綿子を手放す覚悟を決めなければならぬ時が迫っているということなのだ、と思うと頭痛までし始める。

よりにもよって今日なのか、と思ったが、義父の申し出を断るわけにもいくまい。

溜息なのか自分への嘲笑なのかわからない、短い息が零れた。

淡粋に足を運ぶのはこれで四度目だ。

一度目は大学合格のとき、二度目は見合いのとき、三度目は結納のとき、そして今日。

通された奥の小さめの個室で、智紀は落ち着かない気持ちで何度も部屋を見回す。

約束の22時を少し過ぎたところで、實が慌てたようにドアを開け、智紀は反射的に正座をして落ち着きの無さを封じ込めた。

「すまないね、呼んでおいて待たせてしまつて」

「いいえ、お疲れ様でした」

實を前にすると、智紀はいつもひどく緊張する。

恋人や妻の父親を前にした男というものは、多分大体が緊張するのだろつが、木綿子との関係を考えると世の普通の男より度合いがひどいに違いない。

話が本題に入ると、智紀の胃はきゅうつと縮まるように痛んだ。

「持て余していた土地もけつこうな額で売れたし、瑞枝さんのおかげで客足もかなり良くてね。このままいけば、あと1年半か2年ほどで全部返せそうなんだ」

「そう、ですか…」

こう答える以外に、一体何と言えればいいのか。

光昭が言った通り、なんと真面目で律義なことか、しかし全く喜べない。

言葉少なな智紀を見て何を思ったのか、實はやがて小さく苦笑した。「智紀くん、君にはすまないことをしたと思ってるよ」

「は…？」

予想外な實の言葉に、智紀は思わず中途半端な返事を返してしまう。これから言われることがどうも良くないもののように思えて、その予感で背筋が寒くなった。

「君は本当は、…最初は、結婚するつもりなんて無かっただろう？ それなのに、私が不甲斐ないばかりに結局承諾してくれることになって。」

あのかきはすまなかった。助けてもらって、感謝してもしきれんよ。けれど、木綿子の結婚相手が君で、本当に良かったと思っている。ありがとう」

何も、返せる言葉が見つからなかった。

何を言ってどう席を辞したのか、記憶にない。

實の言葉は、結婚を決めた時の木綿子の言葉と重なり、気分が悪くなった。

同時に、結婚相手が智紀で良かったなどと言う實に対する罪悪感や筋違いな怒りのようなものが噴出して、さらに重い気分になった。良い夫婦などではないのだ。

そもそも、夫婦にだってなれていないのだ。

おまけに“妻”には別れてもすぐに一緒になれそうな男の候補もいるときた。

結局、パーティでの男のことが頭から離れていないことが思い知らされ、不快な気分が拍車がかかる。

一気に空けたグラスを目の前のカウンタにタンツと叩きつけた。

「もう一杯」

バーテンダに呆れた顔をされたのは、もう何度目だろうか、数える

のも面倒になってきた。

馴染みのあるバーではあるが、今日は気分が悪いせいで口数も少ないし、不機嫌が目に見えてわかるせいか店の連中も声をかけてはこない。

それをいいことに何杯も何杯も煽るのは、全く自分らしくないとわかってはいるのだが、止まらない。

しかも先ほどから続けて頼んでいるカクテルがカミカゼとは、何とも切ない。

このバーで出されるカミカゼはもともと、ウォッカが多めのレシピで作られるものだ。

アルコール度数も低いわけではないし、何杯も飲んでいれば必然的に酔いも回ってくるというものである。

無意識のうちに、普段の智紀であれば考えられないようなことを頼んでいた。

「なあ…スピリタス、置いてるよな。それベースで作って」

「ちよつと、醍醐さん」

「いいから」

バーテンダは、さすがに、といった様子で止めようとしてきたが、智紀が短く言うつと溜息をついて了承する。

飲んだことは今まで無かったが、スピリタスの威力は噂で聞いているから、出されたグラスを一気に空けるような馬鹿な真似は今回はない。

舐めるように飲んだ一杯は、やはり強烈で、カミカゼの名前にふさわしく、まさしく自爆行為だった。

冷たい水が流れ込んできて、智紀は少しだけ気分が上昇した。

水を吸う枯れた砂漠のように、とにかく水を欲してごくりと喉が上下する。

やっと満足したところで、そういえば店に西條が呼びに来たんだっけか、と思い出した。



けれど、そばにいた人影を見やれば、どう見ても木綿子に見える。こんなに近くで見つめたことなんて無いな、と思いながら目が離せない。

しばらく見ていても動かないから、夢を見ているのだと思った。

と、そこで身動きした木綿子を、どこにも行かせたくなくて、どうせ夢ならもつと傍にいてほしくて、智紀は木綿子の腕を掴んだ。

「智紀さん？」

困ったような顔で、目の前の木綿子が智紀の名前を呼ぶ。

けれど、木綿子は逃げない。

たったそれだけのことで、智紀は嬉しさでいっぱいになる。

なんて、良い夢。

このまま、腕の中に閉じ込めてしまいたい。

たとえ夢でも、いや、夢だからこそ、触れてしまえる。

その誘惑と願望に抗えなくなった智紀は、夢とも現ともわからないその世界で、初めて木綿子に触れた。

「ゆっ…」

酒で焼けたのか掠れた声で、現実では呼んだことのない名前を呼んで口づける。

木綿子はそれでも抵抗せずに、目を閉じて従順に応えている。

夢の中だと、パジャマなんだな、などと考えておかしくなりながらも、智紀は木綿子のパジャマのボタンに手をかけた。

肌に直接触れる空気に木綿子の体がびくりと跳ねたが、そのことに智紀は気づかずに、その柔らかな肌に顔を埋めた。

朝、智紀を目覚めさせたのは、ひどい頭痛だった。

割れそうに痛む頭を押さえるために手を動かそうとした智紀は、自分が閉じ込めるようにして抱いているものに気づき、愕然とした。

木綿子だ。

それも、パジャマのボタンは外れたままで、その胸元には、散らばった赤い印。

誰がそうしたのか、誰が着けたのか、など明白である。

昨日のは、夢ではなかったのか。

手放さなければならなかった矢先に、こんなことをしでかしたのか。

狼狽え、正常な判断ができない精神状態に陥っていた智紀は、さらに失態を重ねることになる。

目を覚ました木綿子が、もぞりと動いた。

その瞬間、智紀は咄嗟に木綿子のパジャマの胸元を合わせた。

「すまない、間違え……」

およそ男として言うべきではない言葉を口走った智紀は、慌てて口元を手で押さえたが、間に合わなかったことを悟る。

木綿子は、目を見開き、紙のように真っ白な顔色をしていた。

智紀が何かを口に出す前に、木綿子はぎこちない動きでベッドを降りると、床に落ちていたガウンをさっと取り、逃げるように部屋を出て行ってしまった。

追いかけることは、できなかった。

## 10（後書き）

泥酔と突然のキスの言い訳、もとい理由でした。  
へタレ智紀め…^^；

夢だと思っていた智紀は、つい“間違えた”と言っ  
てしまいました。  
木綿子にとっては、悪夢のような言葉です…。

とにかく、必死だった。

うまく動かない足を縛れさせながらも必死に動かして、どうにか智紀の部屋から逃れ出る。

木綿子の部屋のドアは、昨晚から開け放たれたままになっていたから、すぐに入ることができた。

部屋に入ると後ろ手にドアを閉め、そのまま力が抜けたようにぺたりと床に座りこんでしまった。

あまりにも衝撃的過ぎたのか、まともな思考がストップしてしまったようだ。

今、智紀は何と言ったのだっだろうか。

胸が痛い、と手を自然と心臓のあたりに当てようとすると、パジャマのボタンが外されていたせいで、指先が素肌に触れた。

そうだった、脱がされかけたんだった、と思い出して視線を下げると、赤いような紫色のような内出血の跡が所々に散らばっている。

これがキスマークというものか、などと思いながらぼんやりとそれを見て、昨晚の智紀を思い出した。

名前を呼ばれたと思ったから、びくびくしながらも、好きにさせていた。

智紀は、顔を埋めて、唇を寄せて、掠れた声で名前を呼んで、そうして安心したようにそのまま眠ってしまったのだ。

そのくせ木綿子を抱き込む腕は絡まったままで、外そうとしてすらしても、また抱き直されて外れなかった。

けれど今、智紀は何と言った？

「すまない、間違えた……」

言われた言葉を、そのまま口に出してみると、また新たなショックが広がる。

誰と間違えたのだろうか。

誰の名前を呼んで、誰にキスをして、誰を抱いていると思ったのだろっ。

考え込む必要も無く、当然のように、一度だけパーティで見たあのひとの姿が脳裏に鮮明に蘇る。

「ゆう、って…紛らわし…」

なんだか急におかしくなつて、笑ってしまった、その声は無様に震えていた。

それでも不思議と、怒りは湧かない。

感じているのはただ、言葉にできないくらいの衝撃と、消えてしまいたいくらいの恥ずかしさだけだ。

泣きたいと思つたけれど、涙は出なかった。

こんな気分で旅行なんて、と思つたけれど約束は約束だ、今更キャンセルもできない。

まして瑞枝が立ててくれた計画なのだ、キャンセルの理由をごまかすなんて器用なことができるはずもない。

瑞枝が気を利かせてくれたのだろっ、移動は夫婦ごとに別れて車ですることになつていた。

運転席と後部座席の間には衝突があり、声が漏れることも無いようになつている。

智紀との間には恐ろしいほどの沈黙が横たわっており、全く瑞枝の意図には反しているが、それが瑞枝たちや運転手にわからないようになることがありがたい。

何もすることが無くて、流れる景色を目で追っていたら、だんだん気分が悪くなってきた。

目を瞑つて、長く息を吐き出す。

ごそり、と隣で身動きする音が聞こえ、何だろっと思を開けると智紀の顔が意外と近くにあり、驚いて思わず背中をシートに押しつける。

「気分、悪いのか」

「…大丈夫です」

「でも、顔色が良くない」

智紀の表情は、心配そうで、気遣わしげで、見ていて苛々した。気分が悪いのに、大丈夫だと強がっている自分にも、苛々する。

それ以上何も言わなかった木綿子に、智紀が窺うように手を伸ばし、てくるのを、咄嗟に木綿子は振り払っていた。

静かな空間には、パシリという手のぶつかる音が、良く響く。

振り払われた智紀も、振り払った木綿子も、その音に驚いたように身を固まらせた。

「あ、ごめんなさ…だ、大丈夫です、から」

「…そう」

智紀は、それ以上もう何も言わずに、手を引き顔を背け、けれど衝立を下げて運転手に車を停めて休憩するようにとだけ告げた。

その横顔は、どこか傷ついているようにも見え、傷ついているのは自分のはずなのに、と木綿子は居心地の悪い思いがした。

観光スポットでは瑞枝たちと明るく楽しく振舞い、車に乗れば智紀と重苦しい時間を過ごし、その繰り返しで宿に着く頃には疲れ切っていた。

それでも、素敵な宿を見れば心が軽くなるというものだ。

通されたのは、家族連れの多い本館とは違う落ち着いた離れのような別館の、雰囲気もとやかな部屋だった。

智紀とふたりで入る部屋は少し緊張したが、リビングやミニバーまである広々とした部屋に、少しだけ気分が和らいでほっと息をつく。けれど智紀とふたりきりで過ごすのは気づまりで、瑞枝と一緒に温泉に入る約束を取り付けて早々に部屋を出ることに成功した。

各部屋に露天風呂が付いているのだが、それとは別に大きな露天風呂もあり、そのことは木綿子を大いにほっとさせた。

お風呂は好きだし、部屋の露天も魅力的ではあるが、今の雰囲気では智紀のいる時に入ることなどできそうもなかったからだ。

備え付けの浴衣を持って大露天風呂へ向かったが、瑞枝はまだ来ていなかった。

多少長風呂になっても平気な木綿子は、先に温泉を堪能することにする。

お湯は熱すぎないちょうど良い温度で、目を瞑ってほーっと息を吐き出し、自然と強張っていたらしい体を緩ませる。

楽しい気持ちと辛い気持ちが同居する旅は、思っていたよりも体力を消耗するらしく、ぼんやりしていると眠気が襲ってくる。

何度目かのあくびをかみ殺したところで、瑞枝がお湯に入ってきた。

「お待たせえ」

「あ、全然ですよ。お湯も、景色も、気持ちいいです」

「でしょう！ ここの旅館、お気に入りなのよ。木綿子ちゃんと一緒に来れて良かったわ」

本当に嬉しそうに言ってくれる瑞枝が、嬉しくて、でもその分余計に申し訳なくて、木綿子は複雑な気持ちを隠して笑う。

けれども、ちゃんと笑えているのか自信が無くなり、木綿子は景色のほうへ目を逸らした。

ふたりしてしばらく無言で景色とお湯を楽しんだ後、沈黙を破ったのは瑞枝だった。

「それにしても、もう1年なのね…」

「…そうですね」

「私が言うのもなんだけど、あの子、ほんと恋愛向きじゃなくて、こんなかわいいお嫁さんが来てくれるなんて思ってたから、嬉しいのよ」

「そんな…」

木綿子を底なしにかわいがってくれる、こんな義理の親ができて、木綿子も嬉しいことは嬉しいのだ。

ただ、肝心の智紀との仲がよろしくないため、どうしても嬉しさも半減してしまう。

「でも、仕事人間だし、不器用だし、木綿子ちゃんも苦労してるでしょ……」

言いながら苦笑交じりにため息をついた瑞枝は、木綿子を窺うように見た途端、じつと一点集中で視線を集める。

その視線に気づいた木綿子は、しかし何を見られているのかわからないでいた。

「…普通は、見ないふりがセオリーなのかしらね」

「え」

笑いながら出された意味深な言葉に、木綿子はようやく何を見られているのか悟る。

朝の衝撃と一日の疲れとで、すっかり頭から飛んでいたが、胸元には智紀の付けたキスマークが散らばっていたのだ。

瑞枝に見られた、という恥ずかしさで木綿子は顔を真っ赤にし、慌てて手で胸元を押さえながらお湯の中に肩まで浸かった。

「バカ息子も、たまにはやるわね」

頭まで沈もうか、というほどお湯に隠れようとする木綿子を見て、軽口をたたくのはそれでやめてくれた。

木綿子の様子をかわいそうと思ったのかどうか、のぼせるわよ、と軽く注意すると、瑞枝は先に上がっていく。

誰もいなくなつた露天風呂で、木綿子は改めて自分の胸元を見つめた。

「ていうか、間違えちゃったそうなんですよ……」

誰も聞いていない、密やかに反響する、本当のこと。

わざと軽く口に出して言ってみたが、全然笑えない。

涙は出ないが、泣きそうになっているのか、頭がつきりと痛んだ。

4人で和やかに夕食と食後のお酒を楽しんだ後、部屋に戻ると、智紀とふたりきりの時間がやってくる。

疲れとそこに入ったアルコールのせいで、ふたりともこれ以上起きているつもりは無かった。



恐る恐る足を踏み入れたベッドルームには、ベッドが二つ並んでいた。

ベッドが一つとか、布団が並んで敷いてあるとか、そういう想像をしていた木綿子は、ひとまずこっそりと安堵のため息を漏らす。

さつと部屋の奥のベッドの傍に立つと、まだ入り口の辺りで立ったままにいる智紀へ向きなおる。

何も言わずに寝てしまおうかと思ったが、それもあまりに大人げないと思ったからだ。

「…おやすみなさい」

その声に上げられた智紀の顔は、どこかほっとしたように緩んだものだった。

「おやすみ」

返された声も、穏やかなもので、それはとげとげしていた木綿子の心にすんなり入ってくる。

智紀の気持ちが変わらず、しばらくの間見つめてしまうと、智紀は絡まったその視線を、やがて避けるように逸らす。

もうそれ以上は、何かを言うことはできなくて、木綿子はごそごそとベッドへ入り込んだ。

仰向けになっても視界に隣のベッドが入るのがどこかたまらない気持ちにさせられ、木綿子は智紀に背を向けた状態で体の位置を定める。

多分自意識過剰なんかではなく、背中に智紀の視線が刺さっている。かなり疲れていたにもかかわらず、なかなか眠りは訪れなかった。

## 11（後書き）

最低の記念日、幕開けです。

楽しみにしていた旅行も、これじゃ台無しです！

何も言えない智紀、何も言わせない木綿子、ふたりの前途やいかに  
…。

息が詰まる。

移動中の沈黙といい、観光スポットでの無理なはしゃぎ様といい、木綿子の全てが智紀を責めているように感じた。

車の中で、手を叩かれたのは決定的だった。

これまで木綿子が、こうまであからさまに智紀を拒絶したことは無い。

それと同時に、今朝木綿子が見せたあの顔色の失せた表情がまざまざと思い返される羽目になり、智紀は言葉を失った。

あの表情の意味を考えてはみているものの、答えは出ないままだ。

“間違えた”という言葉は、たとえどんな相手であってもあの状況では言ってはならない言葉だった。

それでも一応男の端くれではあるのだから、それは重重わかつている。

だが、そもそも木綿子の反応がその言葉によって引き出されたのかどうかも現時点で確証が持てない。

ここでもパーティの例の男の顔がちらつき、木綿子の真意は益々図れなくなる。

智紀とあんなことになったこと自体に衝撃を受けていたのだとしたら、智紀としてはもう何も言うことはできない。

いずれにしろ、確かに智紀が悪いのだから、そんな資格は無いとわかってはいるが、それでもやはり少しは傷つくものだ。

そそくさと大露天風呂へ向かうために部屋を出て行く木綿子の背中を見送ると、智紀はようやく息をついた。

ひとりになると、智紀はとりあえずリビングで飲み物でも飲むことにした。

だが、ふた口ほど飲んだ後、すぐに置いてしまう。

疲れているせいか腕が重く、グラスを口元に持つていくことすら、既に億劫だ。

智紀は、今更ながら旅行に来てしまったことをひどく後悔した。旅先の宿でも家でも、場所は変われど結局過ごし方に大差無く、むしろ、両親がすぐ近くにいただけ、今のほうが余計にたちが悪い。まだ行程の半分も消化していないのに、智紀も木綿子もお互いに疲弊しているのが目に見えている。

両親の、特に瑞枝の前では、さらに特別気を遣わねばならないため、この後もどんどん疲労だけが蓄積していきそうだ。

それでももし、もしも、昨晚から今朝にかけての出来事が無かったとしたら、もう少し違う旅行になっていたのだろうか。

ふとそんなことを思ってみたが、それこそ今更後の祭りだ、と渴いた笑いが漏れる。

もう考えることさえ嫌になってきた智紀は、思考を振り払うように頭を軽く振ると、立ち上がった。

木綿子は長風呂だ。

大露天風呂に行ったならば早くは帰って来ないだろう、と予想した智紀は、ひとりで部屋の露天を楽しむことにする。

これから始まる長い夜に備えて、とにかく少しでも英気を養うことが必要だった。

少し休んだことで気分もだいぶ回復したと思っていたが、実際はそうでもなかったらしい。

木綿子との間にある神経がやられそうな緊張感と、それを両親に見せないための演技に、あつという間に力を吸い取られた。

疲労と苛つきで、グラスを空けるペースが速まってしまい、思っていたよりも酔いの回りが早い。

智紀は風に当るうと、まだ料理をつついている三人を残してひとりデッキバルコニーへ向かう。

もう真冬ほどではないにしろ、まだ春の空気には程遠いその冷たさ

が、案外気持ち良い。

どれくらいそうしていたのか、体が冷え切ってしまいそうになった頃に、湯気の立ち昇るグラスを二つ持った光昭が来た。

ただのお湯割りだ、と渡されたそれに、正直なところ酒はもう勘弁願いたいと思っただが、口に含んでみると冷えた体に心地好い温かさだった。

グラスに口をつけたまま見やった窓ガラスの向こう側では、瑞枝と木綿子が楽しそうに話しているのが見える。

木綿子は、楽しそうだ。

智紀のいないところでは、本当に、楽しそうだ。

大げさにため息でもつきたいところを、光昭の前だからと堪えたのだが、智紀の発する微妙な何かを勘付かれたらしい。

「…どうだった、この1年は」

何かを探るような、妙な質問をされてしまった。

どうだった、と聞かれても、特別な何かは無かった、としか言いようが無いのだが、そんな答えは期待されていないはずだ。

けれど、サービス精神を発揮するには気力が萎えていて、結局曖昧で無難な答えになってしまった。

「べつに、普通ですよ」

「普通、か…。そうか、まあ…それならいい」

何かを含んだような口調が、いつもの光昭らしくなく聞こえて、智紀はちらと光昭を窺う。

光昭は、どこか遠い目をしていた。

「何か、言いたいことでも？」

智紀の若干遠慮がちなその問いに、光昭は苦笑を湛えた。

「瑞枝に言つと怒られるんだがな、私は正直、時々後悔するんだ」

「…何をですか」

この話の流れで行くと、今一番聞きたくないことを言われそうで、智紀は咄嗟に体を固くした。

意味も無くグラスを口に運びそうになり、動揺を悟られないように

それを抑えつけることに躍起になる。

けれどそんな闘いも、意味を成さない。

「木綿子ちゃんのことだ。冗談だったとはいえ、融資の条件だなどと言ってしまったことを後悔している。」

そもそもあの頃のお前、結婚する気なんて無さそうだったしな……。今だから言えることなんだが、冗談とは言えない冗談だった。

お前も領いたからこそここまで来たには違いがないんだが、同じ引き合わせるにしてもあれは無かった、と思うとな……」

グラスを持つ手に力が入る。

確かに今だから言えることなのだろうが、本当に今更だ、聞きたくなかった。

それに、光昭が言った通り、領いたのは智紀だ。

もういい年をした大人なのだ、親の言いなりになったわけではなく、金が絡もうとそうでなかつたと、結局のところ木綿子を欲しがったのは智紀だ。

「俺は、…嫌なことはありませんよ」

「わかつているさ。ただ、少し気になっていただけだ。」

結婚後も仕事量は変わっていないようだし、今日も、珍しい酒の飲み方をしていたからな」

瑞枝といい光昭といい、嫌なところで勘が鋭くて困る。

いつも全く問題なくうまくいっている夫婦を装うことが、とりあえず今はできないと悟った智紀は、けれど注意深く苦笑を漏らした。

「今日はまあ、ちょっと…喧嘩したんですよ」

正確な表現ではないが、間違いではない。

芝居がからない程度に肩をすくめて軽く言つと、光昭は仕方なさそうに笑った。

「よりによつて今日喧嘩するとはなあ……。まあ、お前もヤケ酒なんぞしないで、年上の懐の大きさを見せるように」

言われていることは尤もなことで、智紀は苦笑を深めた。

それでも、こちらからは何も言わせてくれない雰囲気、今の木綿

子にはあるのだ、と内心で愚痴る。

そんな智紀の気も知らず、光昭は少々癖のある笑みを浮かべて智紀を見やった。

「それに、記念日の夜に旅先の夜とくれば、なあ？」

言いたいことはわかったが、それに乗れる気分ではない。

呆れたような視線をくれてやったが、光昭は悪びれる様子も無く続ける。

「温泉から帰った後、瑞枝がえらい上機嫌だったぞ。お前もやる時はやるんだな、なんて」

温泉には、木綿子が誘ったはずだった。

木綿子は何かを言ったとは思えないが、と考えたところではたと気づく。

朝に目にした、自分が散らしたキスマーク。

それを見た瑞枝が何を想像し何を喜んだのかなど、想像に難くない。智紀はげんりとした気持ちでため息をついた。

「……夫婦そろって、やめてください」

そんな智紀を見て、光昭はおかしそうに笑った後、智紀の肩を軽くたたいて部屋へ戻っていく。

言いたいことだけ言って逃げやがったな、とどこか憮然とした気持ちのまま、仕方なく智紀も部屋へ向かった。

ベッドルームに入る瞬間、馬鹿みたいに緊張していたが、それは木綿子も同様のようだった。

ベッドが二つ並んでいるのを見てあからさまに緊張を緩ませた木綿子が、おかしくて、愛しくて、憎い。

けれど、智紀に対してはずっと押し黙ったままだった木綿子が、ベッドに入る寸前に寄越したおやすみの挨拶が、沁みた。

ささくれ立った心が、穏やかになるくらいには、温かく聞こえたのだ。

同じようにおやすみを返した後、木綿子はしばらく視線をこちらに

向けたままだった。

絡む視線が居たたまれない。

木綿子が何を思い、何を考え、何を望んでいるのか、どう引き出せば良いのかよくわからない。

光昭の言った“年上の懐の大きさ”など、自分には無いと自嘲しつつ、智紀はとうとう耐えきれずに視線を逸らした。

木綿子はぎゅっと体を固くして、壁側を向いて横になっていたが、疲れていたのだろう、しばらくすると眠ったようだった。

その後ろ姿を、智紀は何とも言えない気持ちのままじっと見つめていた。

そして、先ほど光昭としていた話をぼんやりと反芻する。

もしも木綿子との出会いがあのようなもので無かったら、どうだっただろうか。

けれど、恋愛する気も無かった自分が、普通に出会ったところでどうこうする気にはならなかった気もした。

結局のところ、あの出会い方しか無かったような気もするし、そうであったのだから仕方のないことだ。

しかし、木綿子にとってはどうだったのだろうか。

そう思ったところで、また今朝の真っ白な木綿子の顔が思い浮かび、智紀は考えるのを無理矢理中断した。

これ以上考えるのは不健康な気がする。

眠ってしまおうと決めれば、後は早かった。

疲れと酔いに引きずられるように、智紀は夢を見ることもなく泥のように意識を沈みこませた。



## 12（後書き）

最低な記念日パート2（笑）。

智紀もぐるぐると考え込んでおります。

次回は旅行2日目、どうなることやらです。

旅行先でも、体内時計は狂わないらしい。

いつの間に眠ってしまっていたのかはわからなかったが、目が覚めたのはいつもと同じく6時だった。

視界には壁が広がっていて、眠っている間も頑なに智紀から目を背けていた自分を声に出さずに笑う。

今日も智紀は、木綿子が目覚めるよりもずっと早く目を覚ましたのだろうか。

しんとした気配に恐る恐る振り返った隣のベッドは、予想通りと言った良いだろう、既に空っぽだった。

そのことに安堵したのか、もしくは落胆したのか、自分の気持ちもはつきりわからないまま、木綿子はひとつ息をつく。

ベッドから下りて、好奇心からか未練からか、智紀の使っていたベッドに近づいてみる。

シートと枕に多少皺が寄っていたが、整えられたベッドカバーは寝乱れた痕を完全に覆っていた。

そっと触れてみたものの、もうすっかり温もりは消え去っていて、ここで智紀が本当に寝ていたのかどうかも疑わしいほどだった。

心臓がどうにかなりそうだ、と思うくらいの緊張を感じながらドアを開けたが、智紀の姿は無い。

そろそろと必要以上に足音を消しながら移動したが、リビングにもバルコニーにもどこにもいなかった。

とうとう玄関にまで行ってしまったが、揃えて置いてあるのは木綿子の室内履きだけで、智紀は外へ出ていることが確定する。

仕事も無いはずなのに部屋からいなくなってしまうとは、こんなところまでいつもと同じだなんて、とどこか腹立たしい気持ちが沸く。先ほどまで消していたはずの足音を、今度はうるさいくらいに鳴ら

して歩く自分が、ひどく幼稚で馬鹿馬鹿しい。

ベッドを振りかえった時に感じたのは、安堵よりも落胆の割合が多かったのだと思い知らされる。

昨日の自分の態度を思い返せば、智紀も居心地の悪さを感じていることは当然だとわかるのに、なんて我儘なのだろう、とため息が出た。

智紀がいなかったことで、良かったことはひとつだけあった。

昨日は入れなかった、部屋についている露天風呂に入れる。

恐らく智紀は、朝食の時間に合わせて帰ってくるのだろっし、あと一時間半は時間がある。

そつと扉を開けると、海側の景色を一望できる、広々とした空間があった。

「わぁ…すごい」

そばにはデッキチェアも置いてあり、そのまま座ってお湯の音や潮風の音を聞きながら景色を楽しむこともできるようだった。

けれども、お風呂好きな木綿子としては、やはり温泉に浸かって楽しみたい。

こんなところに泊まった経験など無い木綿子は、いったん鬱々とした気持ちは忘れて、思わず子どものようににはしゃぎたい気分になる。帯を解いて浴衣を脱ぐと、持ってきていたバスローブと一緒にデッキチェアの上に掛けて、お湯に浸かった。

源泉の温度が高いのか、潮風が吹いていても、お湯は適度に温かく寒さを感じない。

全身に広がっていく心地好さと、目の前に広がる雄大な景色が、心を静め頭をクリアにしていこうだった。

なんとなく穏やかな気分になれた気がして、木綿子はお湯の中からうんと腕を伸ばす。

デッキチェアのほうへ手を伸ばして携帯を覗くと、既に7時を回っ

ていた。

メイクをしたり着替えたり、いろいろ支度をする時間を考えると、もうあまり時間が無い。

もつと楽しんでいたかったが仕方が無い、と立ち上がり、片足をお湯から出した時だった。

ガラツという音がして、引き戸が開けられた。

この部屋で、この扉を開ける可能性があるのは、ひとりしかない。その智紀とまともに視線が合ってしまい、木綿子は目を大きく見開いたまま、自分の今の格好も忘れて体を固まらせる。

智紀も一瞬ぎよつとしたように立ち竦んでいたが、木綿子よりも先に我に返ったらしく、弾かれたように扉を閉めようとした。

一拍遅れて今の状況を理解した木綿子は、だが慌てたせいで体重移動がうまく行かずに足を滑らしてしまった。

「ひ、っ……！」

息を吸い込んだだけのような小さな悲鳴だったが、智紀の耳にも聞こえたらしい。

「危な……っ！」

焦ったような智紀の声を聞きながら、お湯に叩きつけられる、という恐怖に思わず目を瞑った木綿子は、バシャツというお湯の波立つ音に体を震わせた。

けれど次の瞬間、素肌に触れる掌と押しつけられた浴衣の生地、そして間近で伝わってくる体温を意識して目を見開く。

「……大丈夫か」

ほつとしたようなため息交じりで、聞かれたその言葉は聞こえたのだが、木綿子は咄嗟に何も答えられない。

のろのろと視線を下ろすと、お湯に浸かってびたびたに濡れている智紀の浴衣が目に入る。

助けてくれたのだとわかったが、今の自分の格好を思い出すと、どうして良いのかわからない。

「おい……？」

いつまでも何も言わなかったせいか、心配げに覗き込んでくる気配がして、木綿子は慌てた。

今体を離されては、また智紀の視線に晒されることになるのだ、それだけは何としても避けたいという一心で、体を固くしたまま智紀に縋りつく。

やや間を置いて、智紀は木綿子の言いたいことがわかったらしく、腕を伸ばしてデッキチェアからバスローブを取ってくれた。

「濡れるから、外に。…出られるか？」

「は、はい」

辛うじて出した声で返事をし、智紀と一緒にお湯から出ると、智紀は持っていたバスローブを肩に掛けてくれる。

急いで智紀から手を離してバスローブの前を合わせると、ようやく生きた心地がした。

それと同時に、羞恥心でかつと頬が熱くなった。

また、見られたのだ、しかも今度は明るい朝の日の光の下で、智紀は素面、そして全身だ。

それでも、狼狽えているのは木綿子だけで、智紀は何の反応もしない。

もうどんな顔をして良いのかもわからず、目線を上げられないまま、ひとまず助けてくれたお礼を言うために口を開く。

「あの、ありがとうございます」

「いや、もともと俺が悪かった。大浴場に行っているとはかり思っていて、…驚かせたな。すまなかった」

「いいえ…」

智紀の最後の一言に、意図せずに木綿子の声は硬く強張った。

今、謝って欲しくない、と強く思う。

それは、昨日のことを思い出してしまうからか。

それとも、何をどういう意味で謝られているのか、わからずに不安になるせいか。

あるいは、昨日からの木綿子自身の態度について負い目があるからか。

思い浮かぶ理由はたくさんあるけれども、けれどどれも微妙に当てはまらない気がする。

意識が内側に向いていたせいで、木綿子はそのまま動かずに突っ立っていたが、困っているような智紀の雰囲気を感じてはつと我に返った。

濡れて智紀の脚に張り付いたままの浴衣が目に入り、早く脱ぎたいだろうな、と思ったところで自分が邪魔なのだと思に至る。

そして、謝られたくない理由に行き着く。

疎外感だ。

智紀と、同じ次元で生活できていないという、孤独感。

どんな場に面しても穏やかで、木綿子の対応如何に因らず平然としている態度への、不満。

何をしても正面から向き合ってもらえないような、苛立ち。

完全に智紀に依存していながら、何もできない子どものように幼稚な自分に対する、失望。

ずっと変わらない、仮面のような夫婦関係に関する、焦燥感。

それらが全て合わさって、強烈な疎外感を生じさせているのだ。

扉のほうへ目を向けると、そのすぐ近くに、智紀が持ってきていたらしい替えの浴衣と帯が、くちゃくちゃに落ちているのがわかる。滑りそうになった木綿子を助けるために、よっぱど慌ててくれたらしい。

智紀は、木綿子を嫌っているわけではない、と思う。

妻としては取るに足りない存在と見なされているとしても、少なくとも人としては。

それは、喜べることなのか、救いなのか、複雑な思いで扉に向かって歩を進める。

出て行く前に、浴衣を拾い上げ、智紀のほうへ差し出すと、遠慮が

ちな手がそれを受け取る。

その距離感が、ふたりの間にあるいつまでも近づかない距離を表しているようで、木綿子はいかに哀しみを抑えることができなかった。

智紀の浴衣が完全に手から離れていこうとするその瞬間、思わず指先に力が入る。

裾を捉え損ねて、手は空を掴んだ。

智紀の関心を得ることができない、という最後通告を受けたような気がして、張りつめていた何かがぱちんと音を立てて弾ける。抑えようとする間もなく、涙が零れ出した。

ひどい失態だ、と悟ったのは、頭上からため息が聞こえてきたからだ。だった。

呆けたように体から抜けていた力を必死に取り戻して、涙を拭いたけれど、弾けたものは簡単には治まらない。

「ご、ごめんなさい…」

拭っても止まらない涙に、自分でも嫌気がさす。

あれほど、智紀の前では決して泣かないようにと気を付けてきていたのに、とうとうやってしまったのだ。

早くどこかへ、智紀のいないところへ逃げてしまいたいと思うのに、脚が言うことを聞こうとしない。

躍起になって目元を擦ろうとする手を、智紀が掴んで遮る。

「痕になるから、…やめなさい」

その接触到驚いて顔を上げると、木綿子を見つめるその表情は、いつもの無表情ではなく少しだけ眉を寄せた気遣わしげなものだ。

どこか哀れみめいたものすら漂っていて、せり上がってくる良くない予感に木綿子は身震いした。

「…もう、やめよう」

予感は、外れなかった。

どうやって出てきたのかわからない、扉の外で茫然と立つ木綿子の頭の中で、今言われたばかりの言葉が何度も反響していた。



### 13（後書き）

旅行二日目です。

お約束なハプニングを書いてごめんなさい（笑）。

木綿子の涙にため息の智紀。

もうやめよう、って…どういふことさ！？　といふことで、次回へ  
続きます^^；

完全なる勢いで言ってしまった、というわけではないと思う。

木綿子との関係における限界は、最初からわかりきっていたことで、そしてこれまでも何度も感じてきていた。

もともと、当初からいつか木綿子を解放してやるのだと決意はしていたことでもある。

ただ、正直なところ智紀としては、たとえ不毛でも非生産的でも愚かに思えてもそれでも、形だけでも自分の手の中に木綿子を留めておきたかったのだ。

それならばもつと積極的に行動を起こせば良かったのだ、と笑われるかもしれないが、それはできなかった。

なぜなら智紀から見た木綿子はいつでも、誠実な實の娘らしく律義で忠節で恭順な妻だったからだ。

恐らく木綿子は、智紀が何を言おうと行おうと、拒むことは無かったに違いない。

だが、始まりが間違っている以上、木綿子にとっては負担になるだろうし、全てが虚像になる気がした。

言うまでもないことであるが、智紀は本心から木綿子を解放したいと願っているわけではない。

木綿子に言ってしまった今でさえ、できることなら出してしまった言葉を回収してしまいたいと思っている。

けれど、涙を見てしまった。

それはある意味、衝撃的なことだった。

この一年間、木綿子が泣いているのを見たことは無い。

もしかすると陰で泣いていたのかもしれないが、少なくとも智紀の前で涙を流したことは無かった。

その木綿子が、智紀の目の前で、涙を抑えられなかったのだ。

木綿子の中では智紀以上に、限界がすぐそこまで迫っているのだらう、と想像するに余りある。

そんな木綿子を見てしまったら、これ以上この意味の無い結婚関係に縛りつけることはできないと思う。

実際、智紀が解放してやりさえすれば、木綿子は自由に、そしてきれいにほほ笑むのだろう。

木綿子が幸せなら自分も幸せだとか、木綿子が笑っていられるなら自分は大丈夫だとか、そういうキレイゴトを唱えるつもりはさらさら無い。

けれどそれでも、木綿子が泣くことを望んでなどいないし、そして何より耐えられないのだ。

朝食までには木綿子の涙も止まっていたが、その代わり泣き腫らした目の縁が痛々しかった。

光昭と瑞枝の物言いたげな視線が智紀に集中したが、言い訳する気も起きない。

木綿子は、二日酔いのせいで頭痛がひどいのだと言い訳したが、木綿子はそこまで酒を飲んでいなかったし、無論ふたりは信じていない。

木綿子を心配したふたりが早々に東京に戻ろうと言い出し、慌てたように木綿子が智紀を見上げたが、智紀も異論は無かった。

抗議するように頭を振りかけた木綿子だったが、すぐに顔を顰めて動きを止める。

泣きすぎたせいで頭痛がしているのだらう、こめかみをぐつと指で何度も押さえつけている。

「木綿子ちゃん、無理しなくていいのよ。旅行なんて、いつでもまた来られるんだから」

事情を知らない瑞枝が発したその何気ない言葉は、智紀の心を抉った。

木綿子に視線を遣ると、木綿子もまた複雑そうな表情を浮かべてい

る。

多分、こんな機会はもう二度と訪れないだろう、という思いがお互いの中に同時に根付いているのだ。

光昭や瑞枝に対して今すぐにぶちまけてやりたいような、けれど一生涯ひた隠しにしたいような、矛盾した衝動が智紀の内側に沸き上がる。

しかし、いずれにしろ今が適切な時ではないことくらい、智紀もわかってはいる。

ひとまず木綿子に頭痛薬を飲ませて車に乗せると、智紀は光昭と瑞枝のもとにいったん戻った。

「俺たちだけ先に帰ります。でないと、木綿子が気にするので」

「でも心配じゃない。だいたい、あんなどう見たって泣きましたって顔して…。智紀、どうせあなたが原因なんでしょう」

「まあ…否定はしませんが」

「ま、何ですか、開き直って」

噛みつくように捲し立てられ、まともに相手にするのも疲れておさなりに返答していると、瑞枝はさらに怒り出してしまった。

宥めるように光昭が間に入り、結局光昭と瑞枝は予定通りの行程を行くことに決まる。

瑞枝はまだ怒りを収めてはいなかったが、光昭の手前抑えてくれているらしく、それ以上は何も言われなかった。

昨日した会話から、木綿子との喧嘩が悪化したのではないかと推察したらしい光昭が心配そうな視線をくれたため、智紀は決まりの悪い思いをする。

「…すみません」

小さな声で詫びると、光昭は昨晚したと同じく、智紀の肩を軽く叩いた。

木綿子を解放してやれば木綿子は自由になるが、木綿子をかわいがる瑞枝や責任を感じつつ気遣ってくれている光昭を苦しめるのだから。

不甲斐なさが情けなく、この歳になって親を失望させることになることが心苦しい。

重苦しい気持ちをため息と一緒にひとまず吐き出し、智紀は覚悟したように車に乗り込んだ。

頭痛薬が効いたのか、しばらく経つと木綿子は眠ってしまった。

車の振動や道路の傾斜などによってぐらつく木綿子の体が気になり、智紀はそつと自分に寄りかかせてやる。

じんわりと木綿子の体温が伝わってくるのを感じる。

力なくだらりと垂らされたままの手を取って、膝の上に置いてやるうと思つたが、その手を離せない。

血迷っている、と頭の片隅で警報が鳴るが、それを意に介することができず、木綿子が眠っているのをいいことにそのままにする。

木綿子にこうして触れられたのは、パーティの時と夢だと思つた一昨日の晩と、今朝と、そして今だけだ。

今更ではあるが、夫婦というにはあまりにお寒い事情である。

これでよく一年ももったものだ、と妙に感心してしまう。

そして同時に、今朝の木綿子の泣き顔を思い出して、胸が詰まった。

「泣きたいのは、俺も同じだ……」

涙は出ない。

叫ぶこともない。

それでも、泣いて良いと言われれば人目も憚らずに泣けるのではないだろうかと思うくらい、木綿子への想いはいつの間にか抑えきれなくなっていた。

愚かだと最初からわかっていたのに、必死に抗おうとしていたはずなのに、結局この様だ。

手の中にある木綿子の手を見つめながら、智紀は自嘲気に小さく笑った。

お互い話し合う必要があると感じてはいたが、家に着いても木綿子

の頭痛が治まらなかったため、智紀は木綿子をほぼ強制的にベッドに入れた。

何か言いたげだったが、いつでも話し合いはできると言い聞かせ、渋々引き下がった木綿子はまた眠りの中だ。

木綿子が暮らし始めてからは初めて入ったこの木綿子の部屋で、智紀は落ち着かない気分ですれずそわそわとしていた。

木綿子が眠りに落ちたのを確認すると、智紀はそそくさと部屋を出ようとしたが、ミニデスクの上にあるフォトフレームが目にとまり、足を止める。

てつきり淡谷家や淡粋のスタッフの写真ばかり飾ってあるのかと思ったが、智紀とのウェディングフォトも飾ってあった。

ウェディングフォトはリビングにも一応申し訳程度に飾ってあるのだが、まさか木綿子が部屋の中でも飾っているとは思っていなかった智紀は、俄かに動揺した。

これは、どういうことなのだろうか。

普通、嫌な相手との写真を飾ろうなんて思うはずはない。

ましてウェディングフォトなら尚更そうなのではないだろうか。

義理で結婚しただけの相手との写真を、わざわざ自室にまでも飾る、その意味は何なのだろうか。

まさか、自分はとんでもない思い違いをしてきたのだろうか、と智紀の胸中がざわざわと音を立て出す。

けれど木綿子が家のことを念頭に結婚を決めたのだということは、木綿子の発言からは疑う余地は無かったはずだった。

結婚して以降、わりと最近まではほとんど意味のある接触を持つとさえしていなかったのだから、木綿子との間に何かが育まれる可能性だって無いに等しい。

しかしそれでは、この部屋におけるこの写真の存在の説明がつかない。

眠っている木綿子を窺ってみたが、何かがわかるわけもなく、智紀はため息をつきながらひとまず部屋から出た。

頭の中を整理したくて、けれど具合の悪い木綿子を置いて遠出するわけにもいかず、智紀はモモを連れてマンション内のドッグランに出向いた。

モモを放して、適当に遊ばせ、智紀自身はベンチに座ってぼんやりと考えている。

木綿子と見合いをすることになった時まで記憶を遡らせてみたが、結局、写真を見た時に感じた相容れない何かが解決しないままだ。やがて、他のマンションの住人が犬を連れてやってきて智紀に話しかけてきたため、考えは強制的に遮断された。

他人と何でもない会話を楽しんだせいか、木綿子の部屋を出た時に比べるとだいぶ気分が晴れていた。

結局のところ、木綿子と話し合わなければ何もわからないし、どう転がるにしろ話し合う必要はある。

思い切ってしまうえば、多少気が楽だ。

モモの足を拭いてから家の中に入り、木綿子の様子を見ようと木綿子の部屋に入ったところで、智紀は立ち竦んだ。

眠っているとはかり思っていた木綿子のベッドは空っぽで、家の中に人のいる気配も無い。

念のため家の中を隅々まで歩き、テラスにも上がって確かめたが、木綿子の姿は無かった。

ダイニングテーブルの上にあるメモを見つけた瞬間、智紀は握りつぶしそうな勢いで拾い上げる。

“どうしても今日行きたい場所があったのを思い出しました。少し出かけてきます。 木綿子”

とりあえず、用事が済めば帰ってくる気はあるらしいということに、智紀は安堵の息を漏らす。

けれど、つい一時間ほど前までの木綿子の様子では、出歩くのはか

なり辛そうに思えた。

木綿子は運転手つきの車にも未だに慣れずに、出かける時でもできる限り車を使いたがらないから、多分今日もそうだろう。

心配で、木綿子の携帯を鳴らしてみたが、木綿子の部屋から音が聞こえてくる。

ため息をついた智紀だったが、聞こえた着信音にはつとさせられた。パッヘルベルのカノンは、披露宴の時に流す曲の中で木綿子が唯一希望したものだったはずだ。

悪いと思いつつ、木綿子の携帯を開き、設定を確認すると、着信音はデフォルトのパターン音になっている。

ついでに、アドレス帳を確認すると、醍醐家と淡谷家の家族のほか、パーティの時に話していた例の男のものだけだった。

そして、その中で、個別に着信音を設定されているのは、智紀だけだ。

「何だよ、これは……」

さすがにその意味がわからないほど鈍感では無い。

しかしあまりにひどい思い違いをしていたことが確実となったことで、智紀はしばし呆然としていた。

やがて、のろのろと木綿子の置き手紙に視線を下ろし、もう一度その文面を読んだ智紀は、急ぎたてられるように駆け出した。



#### 14（後書き）

智紀が、何かを掴み、ようやく光が見えてきました。

あともう少しだ、行け〜！（笑）

ということ、このまま一気にほどける方向へ行ける…と思うので  
すが^^

木綿子がどこに行って、そして智紀が追いかけられたのかは、次回  
へ

目を覚ました時、智紀はいなかった。

べつに、ずっと傍にいてくれることなんて期待してはいなかったけれど、それでも少し寂しい気持ちになる。

木綿子の中では、入籍した昨日と挙式した今日と両方が結婚記念日だという認識であるから、今日だって本当は一緒にいたい。

智紀は、もうやめようと言ったけれど、詳細はまだ話し合っていない。

これで本当に終わりになってしまふのだろうか。

これまでの結婚生活は、苦しくてとても幸せなものとは言えないものだったけれど、終わりを考えたことは無かった。

だがそれでも、近づく努力をしたのか、ともし問われれば、満足な答えを返すことはできないのかもしれない、とも思う。

智紀の無関心に怖気づいて、あえて踏み込もうとしたことはほぼ無かったからだ。

ミニデスクの上に飾ってある智紀とのウェディングフォトを手にとって見つめる。

ふと、根拠も無く、この写真の時に戻れたら、と願ってしまった。

きっと戻れたとしても同じことの繰り返しになるには違いないのに、そう思ったら、どうしても同じ場所に行きたくなかった。

式を行ったのは、醍醐の傘下の会社が経営しているホテルだ。

式と言っても、大々的に行った披露宴パーティとは異なり、本当に近しい身内だけを呼んだものだったので、借りたのは人前式用の小さなホールだった。

マンションからさほど遠くなく電車で行けばすぐに着くので、車を呼び慣れていない木綿子はいつものように公共の乗り物に乗る。

“醍醐”を翳すのは慣れていないが、ホテルに着いた時には使わな

いではいられなかったので仕方なく名前を出す。

突然来て予約も無く通してほしいなど言うことが、非常識なことだという認識はあり申し訳なく思ったが、穏やかな対応に安堵した。「今日は平日でお客様も少ないですし、お使いいただいたホールも一日空いておりますので、どうぞごゆっくりなさってください」案内してくれた支配人は、微笑んでそう言うと言と鍵を木綿子に預け、静かに出て行った。

残された木綿子は、ゆっくりとホールの前方へと歩き出す。

予約が入っておらず使う予定が無いからだろうが、装飾がほとんど無く、ガランとした感じがする。

それでも、何となく一年前を思い出せるような気がした。

何の気なしに時計を見ると、12時半を回っていた。

木綿子は、その時間に力無い笑みを浮かべる。

思い出したくないことばかりが浮かぶのが、こういう時の常なのだろうか。

式は本来、10時に始まる予定だったが、智紀が仕事のために大幅に遅刻してきたのだ。

今までで一番の誤差、2時間と40分の遅れは、この時の記録だ。披露宴が割と午後の早めからの予定だったため、時間がかなり迫っており、親族紹介などだけで時間はまたたく間に過ぎた。

誓いの言葉すら端折ったのだ。

誰にも誓わない、脆い結婚生活の始まりだった。

あのとき瑞枝は激怒していたが、木綿子は諦めることを覚えた。けれど今は、どうしても諦めたくなかった。

終わりになんて、されたくない。

終わりになんて、したくない。したくないのだ。

もう帰ろう、と思った時、ドアが勢いよく開く音が聞こえた。

「木綿子！」

ドアの音とほとんど同時に呼ばれた自分の名前に、木綿子は信じられない思いで振り向いた。

今までに智紀から直接名前で呼びかけられたことは無かった。

そして何より、智紀が木綿子がここにいるとわかったことが、木綿子を驚かせた。

「智紀さん、どうして…」

近づいてくる智紀の手の中に、先ほど書いたメモが握りしめられているのが見える。

あの一文だけで、智紀はここがわかったのだろうか。

ぼんやりと考えている間に、智紀は木綿子のすぐ目の前にたどり着く。

ずっと差し出されたのは、木綿子の携帯電話だった。

持ち歩く習慣がまだできていない木綿子は、忘れていたことすら気づいていなかったが、とりあえず受け取ろうと手を伸ばす。

その手は、携帯にたどり着く前に智紀に掴まれた。

そのまま引つ張り込まれるように、木綿子は智紀の腕の中に囲い込まれる。

何が何だかわからないまま抱きしめられる格好になった木綿子は、戸惑いに身動きするが、智紀は腕の力を益々強めてきた。

ぎゅうぎゅうと押しつけ合うような形になり、息苦しさに木綿子は少しだけ咽る。

「あ、の…」

「カノン」

「え？」

「披露宴の時、カノンを流したがったのはどうしてだ？」  
聞かれている質問の意味が、よくわからない。

けれど、智紀に聞かれていることこそが、意味のあることなのではないか、と木綿子は思った。

「きれいで、厳かで、それがずっと繰り返されていく、…そんな風になりたかったんです」

随分と抽象的な答え方になってしまったが、木綿子にとっては精いっぱいだった。

今すぐにでも終わってしまうかもしれない相手に、素直に答えるのも辛い気がして、声も微かに震えていた。

「俺の着信に、カノンを設定したのは…どうしてだ？」

想定外だったその質問に、木綿子の体はびくりと跳ねる。

密かに、想いを込めていたそれに気づかれた、という衝撃は地味に大きい。

けれども、今答えなければ後で後悔することになるだろう、という思いが木綿子の口を開かせる。

「智紀さんと、…そう、なりたかったから」

言った途端、智紀の腕の力が緩み、長いため息が聞こえた。

「君が、俺と、結婚したかった。…そう聞こえるんだが」

返ってきた智紀の言葉が、木綿子の気持ちとあまりにも噛み合わないものだったので、木綿子はわけがわからなくなった。

今の答えからすると智紀は、木綿子が智紀と結婚したくなかったと思っていた、ということだが、そもそもそれからしてわからない。

木綿子は少しだけ緩んだ智紀の腕の中から智紀を見上げたが、冗談を言っているような表情ではなかった。

それでも、確かめずにはいられない。

「あの、それって…真面目に言ってるんですか」

「…君が言っただよ」

「え？ 何を、ですか」

「父を助けてくれてありがとうございます。…結婚しよう、って言った時、そうやって言った。」

だから俺は、君が本当は俺とは結婚したくないのに、家の金のために我慢して結婚したんだと思っていた」

確かに、そう言った記憶はあった。

少なくとも融資の話が最初にあったことを考えれば、それが礼儀だと思っていたから、だからそう言ったのだ。

それを智紀がこんな風に誤解していたなんて、思ってもみなかった。だから智紀は、ずっと木綿子と関わり合おうとしてこなかったのだろうか。

「でも、私、言いましたよ。その後、結婚できて嬉しい、って。智紀さんと結婚できて、嬉しいって、言…っ」

最初から伝わっていなかった気持ちが哀しくて、木綿子はそれ以上言葉を出せなかった。

詰まった言葉の代わりに出てきた涙で、視界がぼやける。

緩んでいた智紀の腕に、もう一度力が込められて、木綿子はまた智紀の腕の中に閉じ込められた。

「そうか、うん、そうだったよな…」

耳元で聞こえる智紀の声は、どこか苦しそうなものだった。

智紀が誤解したことで木綿子も苦しむことになったが、恐らく智紀もこれまで苦しんできたのだと伝わってくる。

もし、もしも、結婚できて嬉しいという気持ちを最初に伝えられていたら、こんなことにはなっていなかったのかもしれない。

木綿子を抱きしめる智紀の腕の力強さが、智紀の想いの強さを反映しているように思え、木綿子は体を預けたまま目を瞑った。

瞼の裏に、いつかのパーティで目にした光景が浮かんだのは、その一瞬後だった。

そしてその次に思い出したのは、昨日の朝智紀が口走った、“間違えた”という言葉。

期待した後に、また傷つくのは嫌だ。

何より、諦めたくないと思ったのだから、はつきりさせなければ前に進めない。

強く温かい腕にそのまま囲われていたい、という気持ちを無理に押し込め、木綿子は渾身の力を振り絞って智紀の体を押した。

木綿子がそんな行動に出るとは全く予想していなかったのだろう、智紀は驚いた顔で、腕を緩めた。

「私も、聞きたいこと、あるんです」

「…どうぞ」

聞く権利は得たけれど、どう言葉にしてよいのか、迷う。

忘れたくて、思い出したくなくて、でも結局忘れることなどできず、不意に思い浮かんでくる光景と言葉。

考えるのも厭うそれを、口に出して質問することは、一種恐怖でもある。

今は、まだ智紀に触れたままの手から伝わってくる智紀の体温だけが、木綿子の唯一の味方だった。

## 15（後書き）

というわけで！

木綿子に対する智紀の誤解は、無事に解けました。

あとは、木綿子が智紀に対して抱いている誤解だけが残ってます。それでもようやくここまで来ましたね…。

解決まで、あともう一歩です。



予期していなかった衝撃に、智紀はうつかりよろめいた。

胸の中に閉じ込めていたはずの木綿子が、智紀を押して腕を逃れたのだ。

木綿子に対する誤解が解けたばかりの今、ようやく木綿子をこの手に抱きしめられたと思ったのだが、この展開はどうなのだろうか。結婚できて嬉しかったのだと言ってくれはしたが、今ではそうではない、とか。

この一年間の自分自身の木綿子へのあまりにも無関心な態度を顧みれば、あり得ないことではないだけに、薄ら寒い気持ちになる。

聞きたいことがあると言った木綿子に、ひとまず了解の返事を返したが、木綿子はなかなか口を開かない。

ただ、ぎゅっと智紀の服を掴んだままの木綿子の指先が、木綿子の好意を伝えてくれているような気がして、それだけが救いだった。

「あのひと。…誰、ですか」

木綿子が、震えるような声でようやく出したのは、そんな質問だった。

が、はつきり言って意味がわからない。

「…あのひと、って？」

智紀がとぼけたとも思ったのか、木綿子は一瞬非難するような視線をくれた。

けれどすぐに逸らし、ぼそぼそと細切れな言葉で話す。

「前に、パーティのときに、腕を組んでたひと、です」

パーティの時はいつも木綿子と一緒にいただろう、と思ったすぐ後に、一度だけ佐那に捕まった時のことを思い出して、智紀はぎょつとした。

あれを、木綿子に見られていたのか、迂闊だった。

しかも木綿子は、完璧に佐那と智紀の仲を誤解している。

だが、それである日の木綿子の硬化した態度の理由がわかった気がした。

それに智紀が家に入るのかどうかしきりに窺っていたのは、佐那に逢いに行くのかどうかを気にしていたのだろう。

智紀自身も木綿子が例の次期家元と話していたシーンを穿って見ていたために、ひどく機嫌が悪かった覚えがある。

木綿子は、それでさらに誤解を深めただろう、かわいそうなことをした。

智紀の動揺と逡巡をどういう意味で取ったのか、木綿子はまた泣き出しそうな表情に逆戻りしてしまった。

智紀はため息をつきつつ、木綿子の指先をそっと包んでやる。

「あれは、従妹の佐那だ。いつもはイギリスにいるし、結婚式も仕事で来ていなかったから、君は顔を知らないだろうけど。

あの日は、あいつが追いかけてる男から逃げるのに、適当な男がちょうどいたっていうんで駆り出されただけだよ。実際、追いつかれて放ってきたし」

「佐那、さん…」

結婚式の時に、名前だけは教えていたはずだから、聞き覚えがあるだろう。

木綿子は一瞬納得したような顔をしたが、そのすぐ後にまた思案顔になった。

「じゃあ、”ゆう”さん…は？」

ほとんどひとり言に近いような微かな音で聞こえてきた新たな名前に、誰のことだろうかと智紀は首を傾げる。

もともと女性関係はそれほど派手では無く、むしろ疎ましくさえ思っていた智紀だ。

木綿子と出会って結婚してから倫理的な縛りも加わり、増して女性とは距離を置いていたはずなのだが、と思った瞬間だった。

「間違えた、のは、誰とですか…？」

最悪だ。

言ってしまった瞬間の木綿子の表情がまざまざと甦り、昨日の自分を殴りたい、と智紀は本気で思った。

木綿子の指先を包んでいた掌に、ぎゅっと力が入る。

「誰かと間違えたんじゃ、無かった。呼んだのも、君の名前だった」  
「でも、じゃあどうして」

「…夢だと思ってたんだ。君が傍にいてくれるわけがないと思っていたから。ずっと、君は俺を嫌っていると思っていたし。」

名前を呼んでも、キスしても、抱きしめても、君が逃げなかったから、いい夢だ、なんて思ってたよ。

だから朝、夢じゃなかったとわかって、動揺した。だけどあれは、ひどい失言だった。傷つけて、すまない。すまなかった」

繰返し謝ると、木綿子はゆるゆると首を振った。

「もう、謝らなくていいです。…でも、紛らわしいですっ」

最後に怒ったような物言いをした木綿子は、泣きたいような、怒っているような、嬉しいような、という非常に複雑な表情だ。

ただ、智紀がこれまでずっと見知っていた、どこことなく悲壮感漂う硬い表情は消えている。

許されたのだ、と思った。

「あの、ゆ、夢だと思うくらい、智紀さんは、ずっと、…そうしたいって思ってたんですか」

遠慮がちにされた木綿子の質問に、智紀は苦笑した。

智紀がどれほど自分自身を抑え込んできたのか、木綿子は知らないのだ。

「思ってたよ。名前を呼んで、キスして、抱きしめたい、と思ってた、ずっと」

木綿子が言わずに濁したことからを、あえて言葉に出して言う。

木綿子はぱっと瞠目し、言葉を理解した次の瞬間、かっ顔全体を熱くさせた。

そして、視線が落ち着きなくうつろうつろと彷徨う。

どう反応するのを見て、木綿子の気持ちを量ってみたかった智紀としては、それでもう十分だった。

けれど、木綿子は意を決したようにきゅっと唇を引き締めると、そろそろと智紀の胸に体を寄せてきた。

智紀が驚いて思わず木綿子の手を離すと、その手を背中に回される。

「…して、ください」

密着しているせいでくぐもった声ではあったが、木綿子は確かにそう言った。

智紀の期待を遥かに上回る反応を見せた木綿子に、智紀は笑いだしたいようなおかしい気持ちになる。

参った。

本当に、完璧に、参ってしまったようだ。

“仰せの通りに”とばかりに、名前を呼び、木綿子を思う様抱きしめた智紀に、以前の無関心な素振りを演じていた面影は欠片も無い。

本当は、誓いの言葉くらいは交わしたかった。

木綿子がぼつりとそう言ったので、智紀はまた罪悪感に苛まされた。結婚式に遅れたのは、仕事のせいだというばかりでは無かった。

確かに仕事をしていて遅れたのだが、その仕事は必ずしも智紀がやらなければいけないものでもなかったからだ。

どうにも気持ちに踏ん切りが付けずにいたせいだ、というなんとも子どもじみた理由。

「すまなかった」

木綿子の辛さに、今更気づいた自分自身の鈍感さと不甲斐なさに、腹が立つ。

謝ることしかできないという事実、打ちのめされる。

背中に回ったままの木綿子の腕に、少し強い力が込められた。

「辛かったのは、お互い様です。智紀さんに、誤解させてしまったのは、私です。だから本当に、もう謝らないでください」

「俺が、勝手に誤解したんだよ」

「だからそれは私が、…って、延々こうなっちゃうんですから、もうっ」

智紀の顔を見上げようと木綿子が身じろいだが、智紀が腕の力を緩めなかったせいでできず、木綿子は軽く智紀の背中をぺちりと叩く。罪悪感を感じないようにと気遣ってくれている木綿子が、愛しくて、逆にまた申し訳ない気がする。

「じゃあ…今、誓おう」

「今？」

結婚したのは一年前だが、本当の意味で夫婦になれたのは、今日の時間からだろう。

やり直しが利くわけは無いのだが、それでも今、やり直したい。

「でも、誰もいないですよ」

「神様がいるんじゃないか」

「ここ、人前式用ホールですけど…」

「本当の神様なら、どこで誓っても聞こえてるよ、きつと」  
勝手な言い分だ。

冒流的かもしれない、と頭の片隅で思うものの、そうですね、と笑う木綿子の前にはそんな理性的な思考は閉ざされる。

死がふたりを分かちまで。

地上でふたりが共に生きる限り、愛し、慈しみ、敬う。

その誓いをお互いに言葉にして、キスで封印した。

まるで、小学生か中学生の少年のようだ、と思う。

木綿子とただ手を繋いで歩いているだけで、満たされた気持ちになるのは、それだけ渴いていた証拠だ。

鍵を返しに行くと、支配人の林（はやし）の目が繋いであるふたりの手に行き、それから木綿子に向かってにこりと笑う。

「ご結婚、一周年でございますね。おめでとございます」

「あ、ありがとうございます」

恥ずかしそうに笑う木綿子の表情に、林は益々笑顔を深めた。

それを横目で見ながら、木綿子のもとへ行く前に林に言われた言葉を思い出し、智紀は少しだけ苦い思いを噛みしめる。

“奇しくも同じ時間の頃でございますね。今回は、間に合うことをお祈りしております”と、言われたのだ。

ホテルを営む人間の観察眼は侮れない。

林は恐らく、結婚式の日から、智紀の気持ちも木綿子の気持ちも見透かしていたのだろう、と思う。

「間に合って、ようございました」

木綿子には聞こえないだろう程度の、微かな音声。

けれど、智紀に対しても、温かな笑顔が向けられていた。

間に合ったのだろうか。

そうだと、思いたい。

智紀を見上げる木綿子の表情を確かめ、智紀は柔らかに笑った。

きっと、今日こそは、間に合ったのだ。

## 16（後書き）

はいっ！ これにて、誤解は全部解けました。

ようやく、ここまで漕ぎ着けました…！

智紀も木綿子も、お互いに向けていた疑惑の矛や、深入りして傷つかないための防護壁を取っ払いました。

やり直し結婚式（笑）もして、やっと夫婦らしくなれたのでした。

携帯からカノンのメロディが流れ、木綿子は読んでいた本から目を上げると、そばに置いてある携帯を急いで手に取った。

それまで足元で伏せていたモモも体を起こしており、木綿子は自分の反応がモモのように反射的であることに笑う。

時刻は午後3時半。

この時刻のメールはこれまでと変わらず、智紀の帰宅時間を知らせる定期連絡便のようなものだ。

けれど、以前と確実に違うのは、出張でない限り智紀が必ず帰ってくるようになったことだ。

仕事量にもよるが、概ねまともな時間に帰るようになったため、以前携帯を開けるときに感じていたようなひどい緊張はもう無い。

『今日は8時過ぎには帰れると思うから』

文面に飾り気は相変わらずほとんど無いけれど、全然気にならない。そんなことよりも、8時という文字に嬉しくなる。

大抵7時から日付が変わる頃までの間で忙しさにより帰宅時間が変わるのだが、10時を超えるときは食事を待たせてくれない。

一度待つていたことがあるのだが、気持ちは嬉しいが体に悪いから待たずに食べなさい、と怒られてしまった。

智紀と和解するまではほとんどいつでもひとりきりでの食事だったのに、智紀と共に食事を摂るようになってからはもう、その味気なさに耐えられなくなっている。

幸せに順応するのに、時間なんてほとんどかからないものなのだ。

『今晚は、何が食べたいですか』

『今日はいいい日本酒を貰ったから、それに合えば。ちなみに割と辛め。和食系希望。大丈夫そうか？』

まだ微妙に遠慮の抜けない言葉に、木綿子は小さく苦笑した。

智紀の中では、これまでの間の木綿子に対する言動への罪悪感が拭



いきれていないらしく、えらく低姿勢なのだ。

亭主関白な実家で育ってきている木綿子としては、そんな智紀の態度はどこか不自然でくすぐったい気がする。

『大丈夫です。楽しみにしててくださいね』

それだけ送ろうとしたが、少し迷った後、文末にきらきらと光るハートの絵文字を入力してみた。

最近智紀とのメールのやり取りにおける文章量が増えたこともあり、ようやく絵文字を使うことを覚えたのだ。

ちなみに絵文字を使えと教えてくれたのは瑞枝で、ハートでも何でもどんな送ってやれと発破を掛けられているのだが、果たして正解なのか。

レビュー画面を見つめてなんだか気恥ずかしい気持ちになったが、思い切って送信ボタンを押す。

しかし送信完了の画面が出ると途端に、なぜか失敗したような不安な気持ちになる。

ハートの絵文字を送ったのは、実は初めてだから、やり過ぎていないかどうかと気になってしまったのだ。

『じゃあ、それを楽しみに、夜まで乗り切るよ』

木綿子の心配をよそに、智紀からは嬉しそうなそんな返信が来て、木綿子はほっと息をつく。

木綿子の膝の上に喉を付けて携帯を窺うモモに、文字が読めるわけでもないのに画面を見せてみたりもする。

「モモ、智紀さんが、楽しみにしてくれるって」

一緒に喜んでくれているのかどうか、モモはふんふんと鼻を鳴らしながら携帯に鼻先を押し付けた。

智紀は仕事中にメールをするようなタイプでも無く、また実際そんな時間の余裕も無いので、日中木綿子が智紀とメールをするのはこの僅かな時間だけだ。

そのこと自体は以前となんら変わりはないのだが、少しだけ増えた文章量と、明らかに見える想いが木綿子を安堵させる。

『お仕事、がんばってくださいね』

木綿子はモモの頭を撫でてやってから、智紀にそう締めくくりのメールを送ると、夕食のメニューをあれこれと考えだした。

智紀の帰りを察知するのは、相変わらずモモのほうが早い。

犬の耳には到底勝てない、ということは重々承知しているのだが、なんとなく悔しかったりする。

モモの後について玄関まで行くと、ちょうど智紀がドアを開けて入ってくる場所だった。

「おかえりなさい」

「ただいま」

木綿子が手を差し出すと、智紀が持っていた鞆と脱いだスーツの上着をこちらに寄こす。

そうして受け取った鞆と上着のその重みに、木綿子は心の底から嬉しさがにじみ出るのを感じるのだ。

「お風呂もできてますけど、先に入りますか」

「木綿子もまだ食べてないだろう。先に食事」

「あ、はい。じゃあ、テーブルで待ってて下さいね」

“木綿子”と名前と呼ばれることに、ようやく慣れてきてはいるのだが、やはりまだときりとする。

名前を呼びたかった、抱きしめてキスをしたかった、と言ってくれた智紀の声が、まだ耳元でこだましているような気分になるのだ。

赤くなった顔をこまかすように歩きだすと、その視界の端に、智紀の足元に纏わりついて頭を撫でてもらっているモモが映った。

今日もまたモモに先を越されてしまったな、と思う。

想いが通じ合っても、モモを羨ましく思ってしまうことがまだあるなんて、と自分に思わず笑ってしまった。

求める幸福感に、際限など無いのだろう。

少し前までは自分の部屋だったドアを素通りして、廊下を奥へと歩

く。

そのことに、まだどことなくふわふわとした気分になりながら、書斎に入り鞆を置く。

それからクロゼットに入って上着を軽くブラッシングしていると、智紀が外したネクタイを手に入ってきた。

「あ、ネクタイ、忘れてました」

「いいよ、自分でやる」

「だめです」

それは私の仕事だ、とばかりに少しだけむっとした口調で木綿子が言うと、智紀は苦笑しながらネクタイを差し出す。

「いつも思ってたが、なんだか亭主閑白みたいだ」

智紀の言葉に、今度は逆に木綿子が苦笑する。

こんな程度で亭主閑白とは。

ほぼ一年中和服で過ごす實の世話を毎日している涼子の背中を見て育ったのだ、洋服なんて楽なものである。

「いいんです。私が、したいと思ってしてるんですから」

これは、本音だ。

今までだって本当はしたかったのにできていなかったことである、今からでもできて嬉しいのだ。

ネクタイをハンガーにかけ、智紀のほうへ振り返ろうとしたところで、智紀の腕が伸びてきた。

「ありがとう」

言葉と同時にぎゅっと抱きしめられ、背中に智紀が密着している形になる。

幸せに順応するのがいくら早いと言っても、智紀のこういった密な接触にはまだ慣れない。

というより、この温度と熱と幸福感に、慣れる日など来るのだろうか、とさえ思ってしまう。

沸騰しそうな頭の片隅で、準備していた夕食が冷めてしまうな、なんて考えつつも、でも離れたくない気持ちが大きくて、体に回る腕

に手を触れさせる。

帰って来てから初めての触れ合いに、先ほどモモを羨ましいと思ったことを思い出して、木綿子は少しだけ笑った。

「何、どうした？」

智紀に目聡く指摘され、どう答えてよいものか迷う。

ペットを相手に嫉妬なんて、馬鹿馬鹿しいと思われる気がする。

「ちよつと、思い出し笑いです」

「何を？」

あまり突っ込まないで欲しい、と思いつつも仕方なく白状してみることにした。

「いつも、智紀さんは帰ってきた時に先にモモに触るから。さっきも。だから、モモが羨ましいな、って思ったのを思い出して。それで」

言いながらあまりの子どもつばさに自分でも辟易し、だんだんとしどろもどろになってしまった。

それでも言い切ったはいいが、返ってきたのは智紀の沈黙で、木綿子は恥ずかしさで顔を俯けた。

「あ、の…食事！ 冷めちゃいますねっ」

焦って智紀の腕から逃れようとした木綿子だったが、智紀の腕は外れなかった。

それどころか、先ほどよりも心なしか力が強くなった気がする。

「え、あれ、智紀さん…？」

「木綿子がかわいいこと言うから、食事どころじゃなくなるよ、ほんとに」

「ええ？」

「明日からは、木綿子に先に触るし。後で、嫌ってほど触るよ」

智紀の言葉が意味するところは明らかで、木綿子は今度こそ全身の血が沸騰したように赤くなった。

モモを構いながらダイニングへ向かう智紀と並んで歩きながら、木

綿子は自然と笑みを浮かべた。

誤解やすれ違いが続いた日々は、確かに苦しいものではあったけれど、今は自信を持って幸福だと言える。

そして、きつとこれから幸福な日々が続いていくのだと思える。

将来の夢は“お嫁さん”だと言っていた幼いころのその夢は、今はきちんと叶えられたのだと思える。

咲けども咲けども実を結ばずに散ってゆく徒花の恋は、今、ようやく終わったのだ。

## 17（後書き）

こんな感じで、木綿子は幸せに過ごしております。

いろいろと智紀に対して思うことはたくさんあったと思いますが、それでも今幸せなら何も言うことは無い感じです。

しあわせな時間を重ねていくうちに、きっともっと“夫婦”がしくりくるのではないかな、と思います。

実を結ばない“徒花”の恋が終わった今、次はどうなるのでしょうか。

次回は智紀編、ついに最終回となります^^

午後3時半にメールをする習慣は変わらない。

変わったのは、何としても早めに帰ろうと躍起になったことだけだ。会議が入っている日を除き、通常のスピードで処理していたらこのくらいで帰れるだろうな、という時間の1時間前の時間をメールするのだ。

そうするとやる気の度合いが変わるせいか、処理能力が必然的に上がる。

しかも、この一年間家に帰るまいとして全て抱え込んでいた仕事も、任せられるものは秘書に任せてしまっようになったので、大幅に時間は短縮できるのだ。

以前と比べると、素っ気なさが格段になくなったメールに、智紀は自然と笑みを浮かべる。

最近の木綿子は瑞枝に教わって絵文字なんてものを混ぜてくるようになり、忙しさで苛つく気分を和ませてくれる。

バイブレーションがメールの着信を知らせ、智紀はもう一度ディスプレイを見る。

メールを開いた瞬間、文字をすっ飛ばして目に飛び込んできたのは、きらきらと光る薄いピンク色のハートだった。

初めて目にするその絵文字に、冗談ではなく椅子から飛び上がりそうになった智紀は、開けっ放しにしていた引き出しの角に膝をぶつけた。

「い…っ！」

生理的な涙が滲んだせいでぼやけている視界で、もう一度携帯のディスプレイを見直してみたが、ハートは確かにある。

幻では無いらしい。

見る人が違えばかなり些細なことなのだろうが、智紀にとっては小さなことではない。

木綿子が、隠さずに伝えてくる気持ちは、誇張でなく、智紀を天にも昇らせるほどの力があるのだ。

膝を擦っている、西條が入ってきたが、智紀の顔を見た途端妙な顔になった。

「何だ」

「いや、どんな顔なんだそれは」

痛みに眉を顰めつつも、ハートを目にして緩んだ顔というのは、やはり複雑極まりない表情のようだ。

時間的にも木綿子とのメールが原因だと気づいたらしい西條は、智紀に許可も得ずにひょいと携帯のディスプレイを覗きこむ。

慌てて隠そうとした智紀だったが、間に合わなかった。

件のハートを瞬時に見つけると、西條はやれやれというような苦笑を漏らす。

「で、今日は何時に帰るって？」

「8時だ」

智紀の答えに、西條は今度こそ声を出して笑う。

これまでの智紀を誰よりもよく知っているのだ、この変わりようにはもう笑うしかないのだろう。

「俺たちの仕事を増やすなよ」

「前はお前たちがやってたことだろ」

「一年もブランクがあれば、面倒くさくもなるだろう。若いのは文句たらたらだ。それに、お前、陰で何て言われてるのか知ってるか？」

「…何だよ」

「お気に入りの愛人ができたんじゃないか、って言われてるぞ」

「はあ？ 愛人って」

新婚のくせにろくに家に帰らず仕事ばかりしてきて、今になって早く帰りだしたので、変な誤解を招いたらしい。

それにしても、女子の妄想力は逞しすぎて未恐ろしい。

それを耳にしていながら、面白がって訂正もしない西條も西條であ



るが。

「馬鹿馬鹿しい。そんな噂構ってられるか」

何と言っても、今日は木綿子の得意な和食系の料理なのだ。

それに、ハートまで付けられてしまったら、楽しみにする他無いに決まっている。

鼻歌まで歌いそうな勢いで上機嫌になった智紀に、西條は付き合いきれないと言うように部屋から出ていった。

木綿子に対する、この愛しさを、どうすれば表現しきれなのか、未だによくわからないでいる。

家に帰ると必ず手を差し出してきて、鞆やスーツなどを嬉しそうに部屋まで持っていくってくれる木綿子を見てみると、柄にもなく涙が出そうになるのだ。

智紀としては、してもらわなくても基本的には良いのだが、木綿子が嬉しそうにする姿を見ることができて、今はとても幸せだ。

それに、思い返してみると、迎えに出てくれながらも手持無沙汰でただ突っ立っていた木綿子がいたことに気づいた。

亭主関白な実家で当たり前のように目にしてきたことを、本当はずっと木綿子もしたいと願っていたのだろう、と思うと胸が詰まる。

愛しいと感じる気持ちと感謝の気持ちとは溢れているのに、それに反して伝える術は未熟で、智紀は木綿子を抱きしめることくらいしかできない。

腕の中に収めていた木綿子が突然笑ったので、何かと思って尋ねてみれば、恥ずかしそうに答えた。

「いつも、智紀さんは帰ってきた時に先にモモに触るから。さっきも。だから、モモが羨ましいな、って思ったのを思い出して。それで」

だんだんとしどろもどろになり、声を細くさせた木綿子を見つめながら、智紀の頭の中はほとんど真っ白になっていた。

何を今更、と詰られるだろうが、木綿子が与えてくれる愛情には、

底が無い。

これまで、よくも気づけずにいたものだ、という脱力感と、それを遥かに凌ぐ幸福感が智紀の心を埋め尽くす。

抱きしめることでさらにその気持ちが膨れていくものだから、木綿子を愛しく思う気持ちは、やはり伝えきることなど到底できないように思えた。

食事を一緒に摂った後は、木綿子が後片付けをしている間、智紀はモモと遊ぶ。

それが終わると、リビングのソファに並んでかけて、適当な番組を流しつつ一日あったことをお互いに話す。

すぐ隣で木綿子の体温を感じて、すぐ傍で木綿子を見つめられること、何でもないことも話して笑いあえることが心地好い。

西條から聞いた、愛人疑惑なんかを話しても、木綿子は楽しそうに笑った。

「じゃあ、私、智紀さんのお気に入りなんですね」

反応するのはそこなのか、とおかしくなる。

同時に、嬉しそうにしている木綿子がかわいくて、笑っているその横顔に、キスをした。

びっくりしたようにぱっとこちらを向く木綿子は、まるで小動物だ。木綿子は、智紀から名前と呼ばれることや智紀が早めに家に帰ること、智紀と一緒に時間を過ごすことにはだいぶ慣れてきている。

ただ、こういった触れ合いには、未だに慣れていないように思える。「お風呂、一緒に入る？」

木綿子の答えはわかっているのだが、毎回聞いてみたりする。

恥ずかしそうに首を振る木綿子がかわいいから、その表情を見たいとか、自分でも腐ってるなとは思うのだが、やめられない。

「さ、智紀さんが先にどうぞ」

いつも通りの答えに、いつも通りの表情だったが、その表情に今までは見たことのない揺れが見えた。

毎日言い続けてきた甲斐があつたらしい。

明日はもう少し粘ってみようか、などと内心で考えながら、木綿子の言葉にひとまず従った。

智紀と入れ替わりに、今度は木綿子が入浴する。

その間智紀は、書斎で持ち帰った仕事を済ませてしまう。

以前は木綿子と居るのが気づまりで、わざわざたくさん仕事を持ち帰ったりしていたものだが、今はそんなことバカらしくてやっつられない。

たまに持ち帰らざるをえなくとも、木綿子がない間か寝てしまつた後にする。

変われば変わるものだ。

書斎を出ると、今はゲストルームに戻った隣の部屋のドアを一瞥し、智紀はベッドルームへ足を進めた。

ずっと智紀ひとりで使ってきたこの部屋は、今は木綿子の部屋でもある。

もともと物欲のあまり無い木綿子は持ち物が少なかったため、部屋に劇的な変化は無いのだが、それでも少しだけ増えた木綿子の物があるのが嬉しい。

先にベッドに入って本を読んでいると、木綿子がドアを開けて部屋に入ってきた。

最初は緊張してそろそろと窺うように入ってきていたが、今は少し慣れたのだろう、普通に入ってくるようになった。

そういった些細な違いひとつひとつが、幸福感として智紀の心に沁み渡っていくのだ。

今夜も、木綿子はネグリジェを身に着けている。

今まで普段はパジャマを着ていたらしい木綿子は、智紀の前ではそうではない。

智紀がほぼ家に帰ってくるようになったので、今ではパジャマの出

番はほとんど無いようだ。

関わりを持つとしていなかった過ぎ去った一年の間でさえも、木綿子が智紀のためにそうしていた理由を、今は知っている。

作っているのが瑞枝だということが、智紀を少々複雑な気持ちにさせるが、さすがに木綿子に似合うものばかりなので、文句は言えない。

ベッドにごそごと入ってきた木綿子の腕を取って、そのまま智紀の脚を跨がせるように座らせる。

向かい合って、俯き加減で、けれどそつと視線だけ上げるようにしてくる木綿子の表情は、単に恥ずかしがっているだけで無意識のくせに、扇情的だ。

指で髪を梳いて、頬を撫でながら、もう一方の手をサイドの紐にかける。

解くと、するりと抜けて、完全なスリットになるものだ。

わざとというわけでもないがゆっくりと紐を抜いていると、耐えられないとでも言うように、木綿子が智紀のその手をぎゅっと抑えた。

「…どうした？ 嫌？」

そんなわけではない、というのはわかっている。

案の定、木綿子はすぐさま首を横に振り、抑えていた手からゆるゆると力を抜いていく。

「さっき、言ったこと、覚えてる？」

「い、やってほど、触る、って…」

言いながら、もう智紀の顔を見ているのも恥ずかしらしく、木綿子は肩口に顔を埋めてしまう。

けれどその分密着度は増して、その高い体温に、智紀の鼓動も早まった。

罪悪感は、消えない。

過ぎた一年は、もう永遠に取り戻すことができないからだ。しかし、だからこそ、木綿子に対する愛しさは増す一方だ。

時期を外して狂おしいほどに咲き誇る徒花の恋は、今、ようやく始  
まったばかりなのである。

FIN .

## 18（後書き）

こんな感じで、智紀も日々感謝しながら幸せを噛みしめております。  
狂い咲いた徒花の恋は、今始まり、これからも続いていきます。

続編等は構想中ですが、いったん完結済みとします。

最後までお読みいただき、本当にありがとうございました。  
多謝。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4320y/>

---

徒花の恋

2011年11月29日22時46分発行